

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2014.2

No.107

会報

目次

■ 理事長からのメッセージ (2014年初春)	1
■ 第37回(2014年)日本分子生物学会年会 開催のお知らせ(その1)	2
■ 第36回日本分子生物学会年会 開催報告	10
■ 日本分子生物学会キャラクターデザイン募集のお知らせ	13
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	14
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 バランスのとれた研究環境を目指すために—2013属性調査から学ぶこと—	29
■ キャリアパス対談 第3回:井関祥子×岩崎 渉	31
■ 「女子中高生夏の学校2014」実行委員募集のお知らせ	33
■ 第18期第3回理事会記録	34
■ 平成26年度(第36回)通常総会記録	41
■ 平成25年度(2013年度)収支決算報告	44
■ 監査報告書	49
■ 平成26年度(2014年度)収支予算	50
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	51
■ 研究助成一覧	51
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○第16回マリンバイオテクノロジー学会大会 ○第27回国際ポリフェノール会議2014名古屋 合同開催 第8回タンニン会議2014名古屋	55
■ 第18期役員・幹事・各委員会名簿	56
■ 賛助会員芳名	57



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

<http://www.mbsj.jp/>

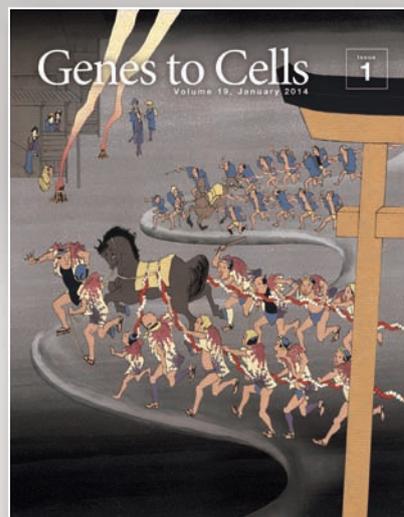
Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida

Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.731

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界で4,000以上の機関で読まれており、年間240,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。



Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への掲載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』(有料)をご利用いただけます
- 2012年9月より、全ての総説は日本分子生物学会が費用を負担してOnlineOpenで公開中

オンライン投稿はこちら

<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2011年・2012年出版 引用数TOP論文 *2013年12月現在

Molecular mechanisms of the Keap1-Nrf2 pathway in stress response and cancer evolution (Volume 16, Issue 2)
Taguchi, K; Motohashi, H; Yamamoto, M

SIRT2 down-regulation in HeLa can induce p53 accumulation via p38 MAPK activation-dependent p300 decrease, eventually leading to apoptosis (Volume 16, Issue 1)

Li, Y; Matsumori, H; Nakayama, Y; Osaki, M; Kojima, H; Kurimasa, A; Ito, H; Mori, S; Katoh, M; Oshimura, M; Inoue, T

Lectin microarray analysis of pluripotent and multipotent stem cells (Volume 16, Issue 1)

Toyoda, M; Yamazaki-Inoue, M; Itakura, Y; Kuno, A; Ogawa, T; Yamada, M; Akutsu, H; Takahashi, Y; Kanzaki, S; Narimatsu, H; Hirabayashi, J; Umezawa, A

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。

ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。

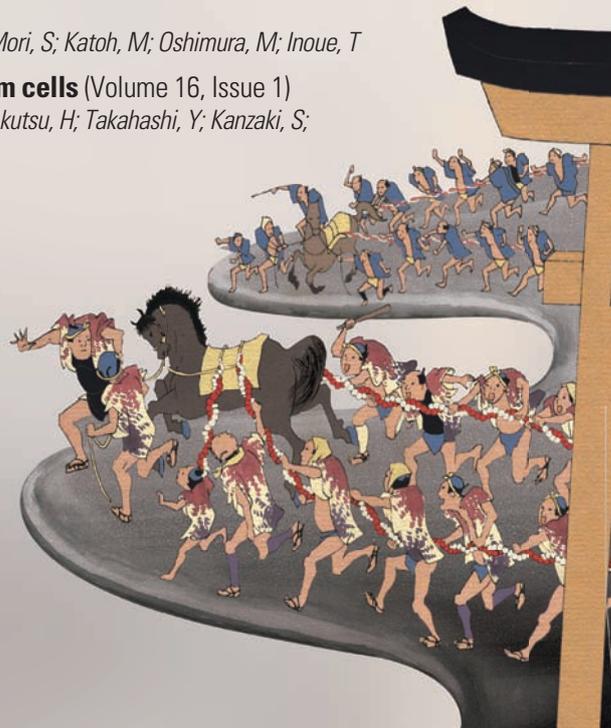
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、

Wiley カスタマーサービスにて承ります。

Wiley カスタマーサービス: cs-japan@wiley.com

WILEY Blackwell



理事長からのメッセージ (2014年初春)



学会はみんなでつくろう！

明けましておめでとうございます。

2014年が皆様にとって素晴らしいものになりますよう、心から祈っています。

2013年の12月は慌ただしい月でした。「師走」は、師匠の僧がお経をあげるために東西に馳せる月と言われますが、日本分子生物学会にとっては、年會が開催される時期です。昨年の第36回年會は、近藤滋年會長の直前エフォート120%という肝いりで、単独開催でありながら参加者7,836名という、賑やかな年會となりました。サイエンス関係では、門脇孝先生を委員長とするプログラム委員会により指名されたオーガナイザーによる「冠シンポジウム」というスタイルが目を引きました。また、塩見美喜子先生を委員長とするキャリアパス委員会が企画された2つのランチョンセミナーが大盛況であったと聞いています。

……「聞いています」という表現を使わざるを得なかったのは、私自身が他の企画に参加していたからです。中でも「理事会企画フォーラム」と称する「研究不正関係企画」は、第1日目から3日目まで午前・午後1コマ(90分)ずつ、合計6コマが充てられ、実際には各セッションの終了時間が伸びたりしましたので、合計で10時間に及ぶ時間を割きました。他のサイエンス関係セッションとは平行して行いましたので、毎回の参加者は数十名でしたが、延べ人数としては200名くらいであったでしょうか。小原雄治副理事長・研究倫理委員長、中山敬一副理事長、篠原彰年會ワーキング委員や執行部の多大なご尽力により、研究者サイドだけでなく、研究資金配分機関、マスメディア、Nature編集者等も参加し、活発な議論が為されました。各セッションの「まとめ」はすでに学会HP上に掲載しており、さらに全文記録が公開される予定です。今後、昨年6月に行った会員webアンケートや今回の議論をもとに、「研究公正局」のような組織が必要なのかどうか、学会としてはどのように研究倫理についての意識啓発や教育に関わるべきなのか、取り組んでいきたいと思えます。

関連して、暮れも押し迫った26日に、東京大学から「中間報告」としての記者発表があり、合わせて理事長宛てに「論文不正の疑いに関する調査(中間報告)の公表について」という書面が届きましたので、こちら翌日の27日付でHPに公開しています。そのコメントにも記しましたが、日本分子生物学会としては、生命科学分野研究の健全な未来に向けて、自らの襟を正して研究不正問題に対処することが重要と考えております。私たち科学者は、研究費のかなりの部分が公的な資金によって担われていることを念頭に、社会からの信頼を損なうことのないようにしなければなりません。そうでないと、自由な意志に基づく基礎研究を展開することが難しくなるでしょう。

「社会との関わり」について、近藤年會では「ガチ議論」という企画で、鈴木寛元文部科学副大臣、原山優子総合科学技術会議議員などお呼びして、科学政策についてのパネル討論を行いました。こちらはUstream配信やTwitterでのコメントを受けました。私自身は、もう一つの企画「市民公開講座:生命世界を問う」に登壇させて頂きました。こちらは別名「TED風プレゼン企画」であり、たった12分の持ち時間で「研究の楽しさ、研究者の人となり」を伝える、というミッションでした。リハーサルも9月に日本科学未来館で行ったのに加えて、当日午前中にもゲネプロを行うという力の入れようであり、私自身も普段とは別の緊張感を持って臨みました。追ってYouTubeに動画がアップされ、当日会場に来られた700名余の方々以外の市民の方々にも視聴して頂けるという意味で、より波及効果の大きな企画になったと思われまます。

年會では他にも、楽しい「アート企画(Genes to Cells表紙の展示、サイエンス画像のコンテスト、Jazzセッション等)」や「海外ポスドク招聘企画」など(盛りだくさんに!)ありました。最終日午後の「2050年シンポジウム」等のセッションまで参加された方も多く、各種表彰式などは一大「学芸会」的なノリだったと思えます。それらも含め、第36回年會についてのアンケートを現在web上で行っていきます。「ここが不満・良くなかった」という点だけでなく、「良かった・続けてほしい」企画については、今回年會に参加されなかった方も含めて、是非ご意見をお寄せ下さい。皆さんの意見のフィードバックが次の年會(年會長は小安重夫先生です)に繋がります。学会は皆でつくるものなのですから。

2014年1月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第18期理事長
(東北大学大学院医学系研究科)
大隅 典子

第37回(2014年)日本分子生物学会年会 開催のお知らせ(その1)

会 期：2014年11月25日(火)～27日(木) (3日間)
会 場：パシフィコ横浜
年 会 長：小安 重夫 (理化学研究所統合生命医科学研究センター)
演題登録期間：2014年7月1日(火)～7月31日(木)予定
事前参加登録期間：2014年7月1日(火)～9月30日(火)予定
*サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性があります
年会事務局連絡先：第37回日本分子生物学会年会事務局 (株)エー・イー企画 内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4階
Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp
年会ホームページ：http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014/

【年会のコンセプト】

～サイエンスを楽しむ～

年会の宝は実験データです。37回年会は、サイエンスの議論を中心に、皆がデータを前にとことん議論のできる学会を目指します。

私は学生時代に第1回の分子生物学会の年会に参加しました。最初は2会場のみのお小さな学会でしたが、会場の熱気はすごいものでした。新しい学会が出来た高揚感もあったとは思いますが、皆がスライド(パワポはありませんでしたからね)のデータに喰い付きながら侃々諤々の議論を繰り広げていました。

はじめは分子遺伝学が中心でしたが、しだいに分子生物学の手法が様々な分野に取り入れられたことから、参加者はどんどん増え、学会はどんどん大きくなりました。演題数も会場も増えましたが、逆に全員が口頭発表をする余裕もなくなり、ポスターが中心になっていきました。このような中、分子生物学会の原点に戻るつもりで、参加者が持ち寄る貴重なデータを元に、皆で議論ができる年会を目指します。

年会の中心は発表者が持ち寄るデータです。37回年会はポスター討論を中心にします。ワークショップも一般演題から採用します。指定演者もありますが、指定演者にもポスターを出してもらいます。そして、32回年会で行われたディスカッサーを復活します。ワークショップの後にはポスター会場へ移動してもらい、10個のポスターを一人のディスカッサーが担当し、一つ一つポスターを周り、一般参加者ととも演者と議論を戦わしてもらいます。年季の入った研究者も初めて参加する学生も、皆が同じようにディスカッサーを相手に議論を戦わします。この時間には他の行事は一切入れません。

目の前のデータが自然の謎の何を我々に語ってくれているのか、それを解き明かしていくのがサイエンスの醍醐味です。そんな楽しみにハマったのが科学者です。分子生物学会の年会でそんな思いを新たにすることができたら幸せだと思っています。

2014年11月に横浜でお目にかかりましょう。

第37回日本分子生物学会年会
年会長 小安 重夫
(理化学研究所統合生命医科学研究センター)

【年会組織】

〈組織委員会〉

年 会 長：小安 重夫（理化学研究所）
組織委員長：嶋田 一夫（東京大学）
組 織 委 員：荒木 弘之（国立遺伝学研究所）
石野 史敏（東京医科歯科大学）
江口 有（協和発酵キリン株）
I T 担 当：岩崎 渉（東京大学）

〈プログラム委員会〉

プログラム委員長：塩見美喜子（東京大学）
プログラム副委員長：渡邊 嘉典（東京大学）
プログラム委員：小林 武彦（国立遺伝学研究所）
斎藤 通紀（京都大学）
白髭 克彦（東京大学）
高橋 淑子（京都大学）
内匠 透（理化学研究所）
竹田 秀（東京医科歯科大学）
豊島 文子（京都大学）
吉田 稔（理化学研究所）
吉森 保（大阪大学）
渡邊雄一郎（東京大学）
プログラム庶務幹事：黒柳 秀人（東京医科歯科大学）

【プログラム概要】

◆シンポジウム（全 18 テーマ）

本年会では、プログラム委員の名前を冠したシンポジウム 12 企画に加え、テーマ指定によるシンポジウム 6 企画を予定しております。

1. 塩見 美喜子 企画 非コード RNA の分子生物学とその応用

Molecular Biology of Non-Coding RNAs and its Application

オーガナイザー：塩見 美喜子（東京大学）

生命の複雑さをタンパク質と同じ座標で制御する Non-Coding RNA の研究は急速に展開している。しかし、Non-coding RNA の種類の多さに加え、生物間の保存性の低さ、特定のパートナータンパク質と RNP 複合体を形成してはじめて機能を獲得するといった特異な性状などが本研究をより複雑なものとしており、今後、さらなる新しい切り口が望まれる。本シンポジウムでは、Non-coding RNA の Basic Science のみならず、CRISPR をはじめとした革新的な新技術・新実験手法の開発、応用にも焦点をあて研究を展開している国内外の研究者に講演していただくとともに、今後の展望を考える場としたい。

2. 渡邊 嘉典 企画 染色体分配の分子メカニズム

Molecular Mechanisms of Chromosome Segregation

オーガナイザー：渡邊 嘉典（東京大学）

染色体分配の異常は染色体の異数性をもたらし、細胞のがん化およびその悪性化を促進すると考えられている。染色体分配の基本的な分子機構のさらなる理解を深めることにより、がん細胞などでみられる染色体分配異常の原因について議論する。

3. 小林 武彦 企画 ゲノム再生

Regeneration of Genome

オーガナイザー：小林 武彦（国立遺伝学研究所）

35 億年前に地球に生まれた最初の細胞は、現在も人類を始めすべての生物の体の中で脈々と生きている。化学的に脆弱である遺伝物質 DNA は、常に改変、崩壊の危機にさらされてきたが、細胞は DNA を修復、再生する能力を獲得し、進化しつつも維持されてきた。そのゲノムの再生能力は生命の連続性を保証するだけでなく、iPS などの夢の医療をも可能にする。本シンポジウムではゲノム再生機構とその未来像について議論する。

4. **斎藤 通紀 企画** 幹細胞のプログラミング/リプログラミング
Programming/Reprogramming Stem Cell Fate
オーガナイザー：斎藤 通紀（京都大学）

幹細胞を起点とした再生医療の実現には、幹細胞の分化・増殖機構及び関連する細胞系譜の発生機構の理解が必須の基盤となる。本シンポジウムでは幹細胞の programming/reprogramming 機構と分化制御に関する第一線の研究者を招聘し、細胞形質制御機構・技術の最前線を議論したい。

5. **白髭 克彦 企画** エピゲノム異常が絡む疾患
Epigenetic Dysregulation and Disease
オーガナイザー：白髭 克彦（東京大学）

エピゲノム制御は生命の維持、継承に関わる様々な生物学的システムの根幹にある。本シンポジウムではエピゲノム制御異常が絡む疾患として、小児の分化発生異常関連疾患及び癌を取り上げ、これら疾患の解析を通して明らかとなりつつある新規の制御プロセスから創薬ターゲットまで幅広い話題を提供する。

6. **高橋 淑子 企画** 動物発生における細胞・組織のコミュニケーション
Cell- and Tissue Communications during Development
オーガナイザー：高橋 淑子（京都大学）

動物のからだを作られるとき、細胞レベルでの挙動に加え、組織や器官同士に交わされる多様なコミュニケーションが鍵をにぎる。遺伝子-細胞-器官-個体をつなぐアプローチから、多細胞体制における機能的協調の極意に迫りたい。

7. **内匠 透 企画** こころの分子生物学
Molecular Biology of Brain and Mind
オーガナイザー：内匠 透（理化学研究所）

脳（こころ）を理解する上で分子生物学的手法だけのアプローチには限界があることは確かであるが、そのことを理解した上で、細胞レベル、回路・個体レベル、さらにはその病態との関連を分子の視点で研究している方々に登壇いただき、普段神経科学とは無縁の分子生物学者にも脳科学の包括的な最近の動向を知っていただけるようなものを提供する。

8. **竹田 秀 企画** 個体の恒常性維持における臓器連関
Interacting Organ Systems Governing Whole Body Homeostasis
オーガナイザー：竹田 秀（東京医科歯科大学）

近年の分子生物学、遺伝学等の発展により、生理機能や病態の分子レベルでの理解が大きく進展した。その一方、個体レベルでの恒常性維持には細胞間、システム間、臓器間の高次ネットワークによる情報伝達機構が重要であることが明らかとなってきた。本シンポジウムでは、個体の恒常性維持を担う、様々な階層の制御機構について議論したい。

9. **豊島 文子 企画** 対称・非対称分裂による細胞運命決定と組織恒常性維持
Cell Fate Decision and Tissue Homeostasis by Symmetric and Asymmetric Cell Division
オーガナイザー：豊島 文子（京都大学）

細胞の対称分裂、非対称分裂振り分け機構は、幹細胞の運命決定や組織構築に重要である。本シンポジウムでは、対称・非対称分裂を決定するメカニズムと、それがどのようにして細胞運命さらには組織構築に貢献するかについて、様々なモデル生物を用いた研究を紹介していただき、このメカニズムの共通性と特異性について議論する。

10. **吉田 稔 企画** 代謝とエピジェネティクスの分子交差点
At the Molecular Crossroad of Metabolism and Epigenetics
オーガナイザー：吉田 稔（理化学研究所）

エピジェネティクス制御の中心を担うアセチル化、メチル化等のヒストン修飾酵素の働きは、修飾基ドナーであるアセチル CoA、S-アデノシルメチオニン（SAM）をはじめとして多様な生体内の一次代謝産物や栄養ストレスによって制御されていることが明らかになってきた。代謝とエピジェネティクスの相互作用は、時として次世代に継承されることから大きな注目を集めている。栄養ストレスなどの環境要因でエピジェネティクスが変化するメカニズムとエピジェネティクス異常が代謝疾患につながるメカニズムという双方向からのアプローチに焦点を当て、慢性疾患に至るエピジェネティクス機構について議論する。

11. **吉森 保 企画** 細胞の中で膜が動き、ちぎれ、融合し、いのちが紡がれる
Inside Cells, Membranes Move, Fission, and Fuse to Maintain Life
オーガナイザー：吉森 保（大阪大学）

2013年のノーベル医学生理学賞の対象となった小胞輸送研究は今や、高度に統合管理された物流ネットワーク、生体機能と密接に関係したオルガネラの変幻自在の形態変化、オルガネラ間相互作用などの多彩な研究に発展している。ノーベル賞受賞者達が30年前に切り拓いた細胞内膜ダイナミクス分野の現在の到達点を紹介する。

12. **渡邊 雄一郎 企画** 環境適応につながる多様な分子基盤
Diverse Gene Regulation Systems for Environmental Adaptation
オーガナイザー：渡邊 雄一郎（東京大学）

生物は周囲の環境の変化に常にさらされる中で、多様な遺伝子発現の切り替えをしながら生きてきている。さまざまな環境変化に対する適応に関連して、さまざまな制御機構があきらかとなってきた。必要な分子種が入れ替わる際に“不要”となったmRNAを分解や格納する系、RNAプロセッシング装置の変化など生物種をこえて多彩な制御系が知られるようになった。研究対象を越えて、さまざまな生物種で見いだされた事例を知り合う場とする。

13. **テーマ指定 企画** 腸内フローラと宿主の生理・病理
Gut Microbiota on the Host Physiology and Pathology
オーガナイザー：大野 博司（理化学研究所）
大谷 直子（がん研究所）

ヒトを含む動物の腸内には膨大な数の共生細菌、腸内フローラが棲息している。腸内フローラはビタミンや必須アミノ酸などの供給や宿主免疫系の賦活などの有益作用を持つ反面、そのバランスの破綻は、炎症性腸疾患などの腸疾患のみならず、肥満や糖尿病、動脈硬化症などの生活習慣病や肝炎・肝がんや多発性硬化症などの脳神経疾患との関連も指摘されている。本シンポジウムではこのような腸内フローラの作用について議論する。

14. **テーマ指定 企画** 進化と多様性
Biological Evolution and Diversity
オーガナイザー：石野 史敏（東京医科歯科大学）
梅園 良彦（徳島大学）

「進化と多様性」は生物学の基盤であり、その時代ごとに様々な分野からのアプローチが試みられ、新しい概念が生み出されてきた。今、この問題はどのように捉えることができるのだろうか？ 本シンポジウムでは、総合科学の面からこの問題をとらえ、発生生物学、集団遺伝学、エピジェネティクス、ゲノム科学などの分野からユニークなアプローチを展開しておられる研究者の講演をもとに、そこから見えてくる新しい進化像について、会場の皆さんと熱い議論をしたい。

15. **テーマ指定 企画** 膜蛋白質の体系的構造機能解析技術の確立に向けて
Towards Establishment of Systematical Structure-Function Analysis Technology of Membrane Proteins
オーガナイザー：濡木 理（東京大学）
山下 敦子（岡山大学）

膜蛋白質は、細胞膜を介したシグナル伝達や物質輸送などの重要な機能を担うため、主要な創薬ターゲットでもある。しかし、その構造解析はきわめて難しく、立体構造に基づいた医薬分子設計の進展を遅らせるボトルネックになっている。そこで本ワークショップでは、創薬標的膜蛋白質に対する最新の構造機能解析技術とその成功例を紹介し、本領域の研究加速の重要性と打開策について議論したい。

16. **テーマ指定 企画** 生命システムの階層性に構成アプローチで挑む：複合的な視点による深化
Synthetic Study to Uncover Hierarchical Ordering of Biological Systems
オーガナイザー：木賀 大介（東京工業大学）
杉村 薫（京都大学）

定量的測定に基づいたモデルを、生命の階層性を意識した構成アプローチによって確認する。近年の技術的な進展により、生物学においても他の諸分野と同様に、古典的な再構成実験の時代に萌芽があったこの研究の流れが深まりつつある。本シンポジウムでは、新規測定手法、定量生物学、数理生物学、合成生物学についての講演を通じ、生命システムの諸階層の間をつなぐための複合的な視点による今後の生物学の開拓について議論したい。

17. **テーマ指定 企画** 老化・寿命と老化関連疾患の分子生物学
Molecular Biology of Aging and Age-Related Disorders
オーガナイザー：西田 栄介（京都大学）
原 英二（がん研究所）

老化し死ぬことは一部の生物を除く全ての生物にとって不可避の帰着点である。老化の過程は非常に多様性に富んでおり、そのメカニズム解明は生物学上の根幹的未解決問題の一つである。老化速度（少なくとも一部）が、遺伝子により制御されていることが明らかになってから、個体や細胞の老化から老化関連疾患に至る様々な老化に関する知識が蓄積されている。本シンポジウムでは様々な視点から解明されつつある老化について議論を行いたい。

18. **テーマ指定 企画** 生存戦略としての幹細胞形成と器官再生
Stem Cell Production and Organ Regeneration as an Adaptive Reprogramming Strategy
オーガナイザー：杉本 慶子（理化学研究所）
長谷部 光泰（基礎生物学研究所）

傷害などのストレスによって失った組織や器官を修復・再生する現象は、動植物を問わず広く生物界に見られ、各種生物の生存戦略として非常に重要である。再生過程には、傷害部位において多様な細胞種を新しく生み出す幹細胞の存在が必須だが、幹細胞をどう形成するか、傷害部位で細胞増殖をどう再開するか等、その分子機構の多くが未解明である。本シンポジウムでは様々な動植物の幹細胞形成、再生に関する最新の知見を紹介し、今後の展開について議論する。

◆ワークショップ（約 50 テーマ）

会員より企画を公募します。後述の募集要項をご参照の上、奮ってご応募ください。

◆一般演題（ワークショップ・ポスター）

本年会のワークショップでは指定演題の数を限定し、できるだけ一般演題の口頭発表の機会を増やしたいと考えています。また、ポスターセッションにはディスカッサーを導入し、例年以上に白熱した議論が交わされることを期待しています。演題投稿期間は7月1日(火)から7月31日(木)となります。詳細は6月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆その他の企画

海外在住の若手研究者に対する渡航費補助などの企画を予定しています。詳細は決定次第、年会ホームページにてご案内いたします。

【ワークショップの企画公募について：3月17日(月)受付締切】

本年会では、ワークショップの企画を会員の皆さまより公募いたします。ご提出いただいた企画案は、プログラム委員会において厳正なる審査を行い、採否を決定します。採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。下記要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。

◆募集要項

- ・1テーマあたり150分の時間枠で、約50テーマを採択します。
- ・科研費の新学術領域研究などの大型研究費関連の企画は避けてください。
- ・150分内の演題数は自由ですが、一般演題からの採択を原則とし、指定演題は3題までとします。
- ・指定演者も、国内外を問わず、講演と併せてポスター発表を行うことが必須となります。
- ・講演言語はオーガナイザーに一任いたします。ただし発表スライドは全演者に英語での作成をお願いします。
- ・オーガナイザーは2名とし、両名とも日本分子生物学会の会員に限ります。
- ・オーガナイザーには、該当分野のポスター演題の編成担当を併せてお願いいたします。
- ・女性からの企画応募、および演者への女性の起用を推奨いたします。
- ・海外演者の招聘にあたり、年会からの旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。
- ・国内演者についても、旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。
- ・海外、国内を問わず、非会員指定演者の参加費は免除させていただきます。

◆応募要領

下記事項を明記の上、3月17日(月)までに年会事務局宛、E-mail (mbsj2014@aeplan.co.jp)にてご提出ください。

- 1) テーマタイトル (和文・英文)
- 2) 2名のオーガナイザーの氏名・所属 (和文・英文)
- 3) 概要 (和文・英文 / 和文全角200文字程度・英文半角400文字程度)
- 4) 3名までの指定演者の氏名・所属 (応募時には演者による講演承諾は不要)
- 5) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 6) 大項目-小項目の組み合わせを2つまで (以下の表参照)、および3つのキーワード (自由)
- 7) 予定する講演言語 (日本語 J・英語 E・演者が選択 J/E)
- 8) 予想される聴衆数

大項目		小項目	
1	分子構造・生命情報	a	ゲノム・遺伝子・核酸
		b	タンパク質
		c	糖・脂質
		d	生理活性物質
		e	オミクス
		f	分子進化
		g	その他

大項目		小項目	
2	分子・複合体の機能	a	DNA複製
		b	組換え・変異・修復
		c	エピジェネティクス
		d	転写
		e	RNA・RNP
		f	翻訳
		g	その他
3	細胞の構造と機能	a	染色体・核内構造体
		b	細胞質オルガネラ
		c	細胞接着・細胞運動・細胞外基質
		d	タンパク質プロセッシング・輸送・局在化
		e	生体膜・細胞骨格
		f	細胞増殖・分裂・周期
		g	シグナル伝達
		h	細胞死
		i	その他
4	発生・再生	a	初期発生
		b	器官・形態形成・再生
		c	幹細胞・細胞分化
		d	生殖
		e	神経発生
		f	その他
5	高次生命現象・疾患	a	脳・神経系
		b	免疫
		c	感染
		d	老化
		e	がん
		f	代謝
		g	遺伝性疾患
		h	その他
6	方法論・技術	a	核酸工学・ゲノム編集
		b	タンパク質工学
		c	細胞工学・発生工学
		d	ケミカルバイオロジー
		e	病因解析・診断
		f	バイオインフォマティクス
		g	その他
7	その他	a	—

◆企画提出およびお問合せ先

第37回日本分子生物学会年会事務局（株エー・イー企画 内）

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4階

Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
11月25日 (火)	シンポジウム 9:00-11:30			バ行セミナー 12:00-13:00 キャリアパス 委員会企画 11:45-13:00	ワークショップ 13:15-15:45					フォーラム 19:15-20:45			
	貼付		機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15						ポスター討論 16:15-19:15		撤去		
11月26日 (水)	シンポジウム 9:00-11:30			バ行セミナー 12:00-13:00 キャリアパス 委員会企画 11:45-13:00	ワークショップ 13:15-15:45					フォーラム 19:15-20:45			
	貼付		機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15						ポスター討論 16:15-19:15		撤去		総会・富澤 基金贈呈式 19:15-20:45
11月27日 (木)	シンポジウム 9:00-11:30			バ行セミナー 12:00-13:00	ワークショップ 13:15-15:45					フォーラム 19:15-20:45			
	貼付		機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15						ポスター討論 16:15-19:15		撤去		撤去

※ 2014年1月時点での予定であり、今後変更される可能性があります

第36回日本分子生物学会年会 開催報告

第36回日本分子生物学会年会にご参加の会員の皆様へ

神戸年会へのご参加、誠に有難うございました。

皆さまのおかげをもちまして、2013年の年会も盛会に終わりましたこと、深く御礼申し上げます。

第36回年会では、準備段階から組織委員会の考えを、SNS等を使い積極的に発信して、会員からのフィードバックを取り込むことで企画を作り上げて行き、結果として、数々の実験的・挑戦的な企画が実行に移されました。それらの企画は、一見、ばらばらに見えますが、私(近藤)の頭の中では、全体として、未来における巨大会のあるべき姿を構成しています。年会が終わり総括を行うこの機会に、私が何を作らなかったのかを説明させて戴こうと思います。

(1) 年会長就任に際して考えたこと「分生の存在意義は何？」

分子生物学会は基礎生命系における最大の学会であり、研究者以外にも、多くの関連企業が参加する一大イベントです。しかし、そのアカデミックな意義は、次第に低下していると言わざるを得ません。会員数、年会参加者も最近では減り続けています。30年前は、分子生物学の最新の情報を得るために、年会への参加は必須でした。海外の有名研究者に会って話をするには、大学の力が必要でした。しかし、時代は急速に変化しています。ジャーナルの電子化、SNS、スカイプなどの普及、さらには、研究費が海外渡航や呼び寄せに使えるようになったことで、海外の研究者とのコンタクトは、飛躍的に容易になりました。現在、最先端の研究交流は、国際的に行われる分野を絞った研究集会在主になっています。私の友人の研究者は「分生は、同窓会と修士の学生の発表の練習のために存在すれば良いのです。」と言い切りました。

それはさすがにどうかと思います。学生の発表練習と同窓会のために、8,000人が集まるのは、時間と労力とお金(かなりの部分が、元をたどると研究費です)の壮大な無駄です。それだったら、一刻も早くやめにしてしまった方が良いでしょう。現在、学会は有りすぎるくらいあるのですから。

この危機感は、前理事長をはじめとする、分生の執行部の間では共有されていました。でなければ、大御所でも無い私に、このような大役が降ってくるはずがありません。前理事長から与えられたミッションは、「何でも良いから、何か斬新な事をやって、この閉塞感を打ち破っ

てくれ」でした。まあ、その意図は理解できますが、その肝心の「何か」は、こちらで考えないといけません。

(2) 巨大会にしかできないことは何だろう？

通常、研究者が巨大会に期待するのは、異分野の研究・研究者と接する機会です。ですから、アカデミックプログラムを、より興味深いものにするには必須です。しかし、その作業は通常の年会でも取り組んでいることであり、私よりもふさわしい人がたくさん居ると考えました。そこで、プログラム委員長を東大の門脇孝先生にお願いし、シンポジウム、ワークショップを一任することにしました。プログラム委員会では、各委員の名を冠した「冠シンポジウム」を行う、という斬新なアイデアを出して戴き、実行に移していただきました。各委員が、自分の名を冠したシンポを企画すると言う事で、自らハードルを上げ、より積極的な、野心的なコンセプトを提示したことで、ほとんどのシンポ会場で立ち見が出るほどの盛況になりました。この方式は次期年会にも引き継がれると聞いております。(そもそも、アイデアを出してくれたのが、次期年会長の小安先生です。)

これで通常のプログラムの強化に関しては一定の成果を上げることができましたが、それだけでは「マンネリを打破する」ことはできません。そこで私自身は、巨大会の枠組みとそこに集まる人材の、今までにない活用法を探る事に専念し、2つの重要なテーマに思い至りました。ひとつは、学会が研究者社会の諸問題に答える事。もうひとつは、生命科学研究のアウトリーチ、言い換えれば生命科学の宣伝です。

(3) 研究者社会の諸問題解決機関としての学会

この30年で、分子生物学は発展しましたが、同時に、研究環境に纏わる問題も深刻化しています。PDの就職、論文不正、研究費の配分、雑用の増加などなど。これらは年会の夜に飲みに行って「文科省の奴ら、何も解ってねーんだ」と愚痴るテーマです。でも研究者の間で愚痴っても、何の生産性もありません。無駄です。どうせ愚痴るのなら、学会に来てもらい、ご本人の前でやりましょう。巨大会のパワーを使えばできるかもしれない。現役研究者と科学政策にかかわる人との、公開での直接対話は、きっと何かを生むはずですよ。

こうして出来上がったのが「ガチ議論」企画でした。HPを開設し、1年前から延々と議論を仕込み、本番を迎えました。参加者は、総合科学技術会議常任議員・原山優子、文科省政策評価審議官・川上伸昭、文科省科学

技術改革戦略タスクフォース室長・斎藤卓也、元文部科学副大臣・鈴木寛、ヤフー CSO・安宅和人、の面々。日本の科学政策をハンドルする人達です。議論は夕方6時からでしたが、参加者400名、Ustreamの視聴者2,800名の前で、3時間にわたり熱い議論が戦わされました。その模様は近日 YouTube にアップする予定ですので、是非ご覧ください。また、現在(12月12日)NHKのディレクターと、ガチ議論の模様をTV番組として放映する可能性について話しています。

次に、海外在住のポストドクの就職不安に対応するため、150人の在外研究者に旅費を支給し、国内のPIさらには、製薬メーカーの研究部門6社・ベンチャー3社との懇談の場を作りました(海外PD呼び寄せ企画)。150人という人数は、全体の数を考えると微々たるものかもしれませんが。しかし、他の学会も追随してくれれば、海外で不安の中で頑張っている彼らに、日本の研究者社会が、彼らの事を見捨てていない事を伝えられるでしょう。これから留学を考えている大学院生にも勇気を与えられればと考えます。(このPD呼び寄せ企画はNHK教育TV「Good job! 会社の星」で取材され放映される予定です。)

研究不正問題はもう一つの深刻な問題です。研究者社会が何もしなければ、一般社会からの非難に耐えられません。これに関しても、逃げずに真剣な話し合いが重要と考えました。研究不正フォーラムは「年会」企画では無く「理事会」企画ですが、年会長として研究不正事案にかかわる当事者を招いてのロングラン会議を提案させていただきました。本番では、文科省、JST、JSPS、Nature 編集者、マスコミ(3大紙+NHK)、大学当局者など、それぞれの立場で不正問題にかかわっている当事者を招き、3日間で6セッションに及ぶ討論を公開で行いました。会議の内容は、新聞等で報道され、少なくとも分子生物学会はこの問題を真剣に考えている事を伝える事ができたと考えます。(この内容も全て公開の予定です。また、このフォーラムは篠原彰先生の多大な尽力で可能になったものであることを、ここに、感謝とともに申し述べさせていただきます。)

どの企画に関しても、これだけの関係者・報道を集めることは、一般の学会では不可能です。しかし、巨大会社なら可能なのです。

(4) 研究者の活動を一般社会が注目するイベントとしての学会

巨大会社のもう一つの可能性は、社会に対する宣伝力、すなわちアウトリーチの機能だと考えます。我々の研究資金のソースは税金であり、その成果と面白さを広く知ってもらう事で、はじめて社会との健全な関係が成立します。そこで、どの学会も市民公開講演会をやるのですが、さほど人が集まりません。高い広告宣伝費をかけたり芸

能人を招いたりしても効果は薄く、折角の研究費を捨てているようなもので、忸怩たる思いがします。が、ほとんどの人は「仕方ないや」と諦めてしまっていると思います。しかし、それで良いのでしょうか? 社会からの支援は、研究を続けるための必要条件のはずなのに…。

生命科学は、潜在的には魅力のある情報コンテンツです。確かに、一般人にはハードルが高いですが、巨大会社が擁する多彩な「タレント」をうまく集め、それなりの仕掛けを作れば、ハードルは越えられるかもしれません。

そこでまず、学会の中に色々な手段を用いてアートを盛り込む事を考えました。ポスターセッションのアートコンペを行い、美術的なポスターを表彰。また、サイエンスアートのプロの展示会、さらに、ニコン・オリンパスの協力で、芸術的な顕微鏡写真の展示場も設営しました。これらは、単独でもかなり魅力的なコンテンツにでき上がったと思います。

アートの次は音楽です。15,000人の会員がいれば、その中にプロ級のミュージシャンもかなり存在します。彼らを組織して「分生オールスターズ」を結成し、「ジャズの聴ける学会」を目指しました。実際には、メンバーの発表時間などのため、主なプレー時間は、アカデミックセッション後と最終日のイベントになりましたが、それでも、音楽の流れる学会というイメージは、お堅い雰囲気を変えてくれるものでした。

仕上げは、アカデミックセッションが終了した最終日に、ポートピアホテルの大ホールを使って行ったイベントです。アート展示とジャズの演奏に加えて、2つの一般講演会を行いました。一つ目は、2050年の学会の発表という想定で、本物の一流研究者が想像力と笑いのセンスを競うSFトークショー「2050年シンポジウム」。二つ目は、研究者の個性を前面に出したTEDスタイルのスタイリッシュな講演会「生命世界を問う」。どちらも、発表者を厳選し、徹底的に演出に凝り、エンタテインメント性の高いものに仕上げた結果、1,000人近くの聴衆(学会員をかなり含む)を集め、内容にも高評価を得ました。これらの企画の準備段階からSNSを使って情報を発信し続けた結果、2つの全国紙が記事として事前に報道してくれた他、BSフジの番組(ガリレオX 1月12日11時30分から放映)として、このイベントが録画放送されることになりました。数百万円分の宣伝費が無料になった上に、普通にやる講演会よりも2ケタも3ケタも多い視聴者に生命科学の面白さを宣伝できたことになります。これ等の企画が成功したのは、協力してくれた学会員の皆さんが、アート、音楽、プレゼンの素晴らしいタレントだったからです。これ等の人を集めることができるのも、巨大会社の力であることは間違いありません。

(5) 未来の学会の姿は？

上の2つを組み合わせると、それだけで未来の巨大会の姿が浮かび上がります。通常のアカデミック講演会場の傍に一般向けの会場を用意し、そこで一般講演を行い、さらに、サイエンスアートの展示と音楽を組み合わせ、一般向けのイベントに仕上げます。マスコミに報道され、多くの一般市民が足を運んでくれれば、これまで存在しなかった生命科学のアウトリーチ空間が出来上がるでしょう。これが実現すれば、他の小さな学会は、そのような負担から解放され、時間、研究費、労力を大いに節約できることとなります。また、研究環境に関する重要な話し合いが常にそこで行われることになれば、さらに注目は集まり、我々研究者が、日々何を想い、目指しているか、について外部の人に共感してもらう機会が生まれます。今回の学会で、そんな空間を作ることが不可能でないことが証明できたと思います。未来の学会執行部と年会長の決断に期待したいと思います。また、このような大規模な年会を開催するにあたり、多くの助成団体（日本製薬団体連合会さま、神戸市さま、神戸国際観光コンベンション協会さま）および、展示・ランチョンセミナー・広告・協賛でご協力いただいた企業の皆さまにも深くお礼申し上げます。学会は、単にアカデミアの人間だけでなく、それを取り巻く関係者皆さまとの関係の下に成立しているものです。今後とも、日本の生命科学の発展のためご協力をお願いいたします。

第36回日本分子生物学会年会
年会長 近藤 滋

「追記」

これだけの事をすれば、どれだけ莫大な資金が必要なのか？と気になる方もいらっしゃると思いますが、実は、PDの呼び寄せにかかった費用を除くと、全体として通常の年会とほとんど同じ収支になっています。確かに、それぞれの企画にはそれなりにお金はかかっていますが、最終日イベントにスポンサーがついてくれたことと、徹底して出費を切り詰めた事で、なんとか乗り切りました。例えば今年は、年会の実行委員と招待客のための「会長招宴」は無し、会議は全てスカイプで旅費も大幅に節減しました。最後の実行委員の打ち上げも当然自腹です。これを可能にしたのは、年会企画にボランティアとして参加し、莫大な時間を使って協力してくれた、組織委員の皆さんのおかげです。彼らの献身的な協力なしでは、何もできなかったと思います。ここに謹んでお礼申し上げます。通常の年会ではありえないような企画を多数実行したため、学会事務局の皆さんと、年会事務局（AE企画さま）の皆さんにも、大変な御苦勞をかけてしまいました。最後まで、わがままな年会長についてきていただき、本当に有難うございました。心よりお礼申し上げます。

日本分子生物学会キャラクターデザイン募集のお知らせ

第18期理事長 大隅 典子
生命科学教育担当理事 篠原 彰

本学会では、中高校生やその教員の方々へ「女子中高生夏の学校」への協力や「SSH 生徒研究発表会」での学会ブース出展などを通して、分子生物学の魅力や学会の事業を伝える活動を行っています。今後、生命科学教育活動を進めていくにあたり、中高生にとっても親しみやすく、分子生物学に興味を持つきっかけになるようなキャラクターデザインを募集します。一般の方にも広く愛されるキャラクターデザインをお考え頂き、ふるってご応募くださるようお願いいたします。

1. 応募資格 会員、非会員、プロ、アマを問いません。
2. 方法 作品と必要事項を記入した応募用紙（学会ホームページに掲載）を郵送または E-mail 添付にて、学会事務局までお送りください。
作品は、手書き又はデジタルデータで応募してください。ただし、手書きの場合は、用紙を A4 サイズとし、デジタルデータの場合、ファイル形式は、JPG、GIF、PNG 形式のものとします。
※ E-mail 添付で応募される場合は、添付ファイルの容量は 1 ファイル 2MB 以内で作成ください。
3. デザイン 作品は、キャラクターのイメージが膨らむよう 2、3 カットの作成をお願いします。
キャラクターは、分子、細胞や生物（ヒトを含む）をイメージしたものはもちろん、ゆるキャラ、萌えキャラも大歓迎です。
採用されたデザインは、グッズや印刷物、学会ホームページ等で使用されます。
4. 締切 2014 年 3 月 24 日(月) (応募状況により延長の可能性もあります。)
5. 審査・採用 理事長を中心に学会執行部にて選考を予定しています。詳細が決まりましたら学会ホームページ等でお知らせいたします。
採用されたデザイン応募者には賞金として 5 万円を贈呈いたします。
6. 留意事項
 - ・応募は 1 人 3 点までとし、応募用紙 1 枚につき 1 デザインとします。E-mail 添付で応募する場合は、応募デザインごとにメールを作成してください。
 - ・作品は自作で未発表のものとします。(同一作品、類似作品は不可)
 - ・応募作品は返却いたしません。
 - ・採択案については、提案者をご相談のうえ専門家の修正が入ることもありますのでご了承下さい。
 - ・採用されたキャラクターデザインの著作権を含む知的財産権等の一切の権利は本学会に帰属します。
 - ・審査の結果は、会報や学会ホームページ等でお知らせいたします。

【提出先】

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 2-11-5 人材開発ビル 4 階

日本分子生物学会事務局 / キャラクターデザイン係

E-mail : info@mbsj.jp

キャリアパス委員会 年会企画報告

一昨年まで続いた「男女共同参画委員会」と「研究倫理委員会」の傘下に位置した「若手教育問題ワーキンググループ」が合体し、「キャリアパス委員会」が発足して早一年が過ぎようとしています。2013年12月、神戸年会において本キャリアパス委員会は、「ランチョンセミナー2013 ～日本の分子生物学を牽引する、そして展開する 君たちへのメッセージ～」と題し、二つのランチョンセミナー「セッションⅠ：キャリアパスの多様性と可能性」（初日）と「セッションⅡ：21世紀のアカデミア、君たちは何を目指す？」（二日目）を開催致しました。両日とも400名に及ぶ参加者に恵まれ、盛況なうちに会を終えることが出来ました。来場していただきました参加者の皆様、関係者の方々に深く御礼申し上げます。

「男女共同参画」+「若手教育」=「キャリアパス」。本委員会発足当初、多くの方々の御意見をいただき、最終的にこの“足し算”に落ち着いたわけですが、さて、これはどの様な解釈なのか？と問われても、返答には困難極まるというのが実情です。「キャリアパス」の定義も、実は様々で定まるところを知りません。いい加減なこと！とお叱りを受けそうですが、本委員会のミッションは明白で、学会員、特に若手が直面する問題を把握し、その問題を克服するために必要な「知恵と勇気」を文字あるいは言葉に置き換え、提示（プレゼント）すること、だと考えます。扱うべき問題は、ワークライフバランス、属性、進路、就職、研究テーマ、倫理、云々、と様々ですが、今年我々はその中からノンアカデミックな「ベンチャー」とアカデミック寄りの「研究テーマ」という2つのキーワードを抽出しました。

1つ目のキーワードは「ベンチャー」。これによって、セッションタイトルにある様に、研究者がすすむ道として、アカデミックでも大企業でもなく、こんな選択肢もあるよ、と“多様性”を示したかったのです。そんなことは百も承知、という方もいるかもしれませんが、ベンチャー起業で成功をおさめた研究者の話を直接聞く機会は滅多にないであろう、と考えました。そして、ペプチドドリームの起業で成功をおさめた東大院理の菅裕明先生と、菅ベンチャーと2人3脚を組む、ベンチャーキャピタルUTECHの片田江舞子氏に講演をお願いしました。菅先生は見た目も圧巻（失礼）、どこか私共とは違うオーラを普段から放っておられますが、アンケートには、話も判りやすく、お人柄が出た面白い発表でした、というコメントを複数いただきました。片田江さんは、東大理生化で学位をとられた直後にUTECHに就職された経歴をお持ちです。博士（理学）でありながらノンアカデミアで活躍される女性として、しかもお気づきになった方も多いかもしま

せんが、来春に出産を控えておられ、若手、特に女性のロールモデルになること必至で、今回講演に来ていただいた効果は大きかったと自負しています。

2つ目のキーワードは「研究テーマ」。サブキーワードは「アカデミア」です。ベンチャーというノンアカデミックなキーワードとは対照的ですが、それ故より多くの方達に興味をもっていただけるのではないかと、という考えに基づいています。講師には東大名誉教授堀田凱樹先生をお招きしました。特権で、講演前後、個人的にお話をさせていただく機会がありましたが、若い頃は、コンピュータをご自身で組み立てて使っていた、今でもコンピュータが大好きで家に数台もっている、ということでした。Steve Jobsの様ですねと申しましたら、僕は、金儲けは無理、と仰ってましたが、真に受けるかどうかは別として、優秀さにも多様性があることを実感させられました。

菅先生、片田江さん、堀田先生には、年末の貴重な御時間を頂きまして心より感謝しております。委員一同、改めて御礼申し上げます。

ランチョン後に行ったアンケートには、「大変面白かった」、「勉強になった」、「自分の進む道のコンパスを手に入れた気がする」などポジティブなコメントを数多くいただきました。我々の思惑通りに若手を鼓舞できた様で、冥利に尽きます。同時に、「討論の時間がもっとほしい」「複数人の話がきけたらもっと良い」といった提案もありましたので、来年以降の参考にさせていただきたいと思います。「（ベンチャー起業は）自分には無理かも」という意見もありました。自分自身を見直す機会になったのであれば、それはそれで本企画に意義があったといえるのではないかと思います。

早速、2年目となる2014年の年会企画の準備にとりかからなくてはなりません。毎年（若手教育WGにいた頃からは）、次のテーマを何にするか、は課題です。アンケート中、「来年以降、取り上げてほしいテーマは何か」という問いがありましたが、様々な提案をいただきました。これを参考に、皆で知恵をしぼってより良いテーマを選んでいきたいと思います。個人的な意見で恐縮ですが、今回の、そしてこれまでの経験から得た印象なのですが、若手は「もっといろいろな話が聞きたいし、もっと会話もしたい」のではないかと感じています。研究を進めるには周りの人々との会話、そして交流は不可欠ですが、ラボメンバーの入替わり、面白い話題やエキサイティングな結果はそうそうあるものではありません。研究者は実に単調な、忍耐の要る日々を過ごしがちです。かといって、突然隣のラボを訪問し、先生に、何か面白い話を聞かせてください、といっても相手にされないの

がおちでしょうし、そうする時間も殆どありません。年会で、こういった要望に答えるための企画があってもいいかな、と、漠然と徒然なるままに考えたりもしていません。

キャリアパス委員会の大きなタスクの一つに「属性調査」がありますが、これに関わるコメントも沢山いただきました。「積極的に女性を登用すべき」といったコメントもあれば、「無理にしなくてもよいのでは」といった声もありました。これらの声が女性から発せられたのか、男性からなのか、今となっては判りかねますが、女性自身が、自分の置かれている状況が周りの男性のそれに比べ不当だと感じている、あるいは本当はもっと表に出て活躍したいのだけれど足踏み状態、であるのなら、そっと背中を押してあげる必要があるでしょう。

昨秋、EMBL主催のミーティングに「The Non-Coding Genome」がありました。私はこれに参加しましたが、これを機にちょっと振り返ってみました。4日にわたる会議で参加者は400名強、口頭発表者40名のうち女性は16名、40%に相当します。16名は全てPIで年頃は30代から60代と幅広く、また、Jennifer Doudna、Narry Kim、Edith Heardなど、ちらっと見かえしただけでも「ママさんPI」が目につきます。分生で今、40%を達成することは、残念ながらほぼ不可能に近いでしょう。何故なのか？ ひとつは、母集団が追いつかない。もう一つは、もう聞き飽きたかもしれませんが、日本の若手女性研究者は、周りにロールモデルがいなく、一線で活躍することを「特殊」だと思いがちだからだとも思います。では、その考えを払拭するにはどうしたらいいか。身近にロールモデルがないのであれば、遠くに頼るしかない。例えば、先ほど示した様な海外の学会に積極的に参加してみる。研究の新しい種を拾うと同時に、女性研究者の在り方を知り、自分を鼓舞するために。出来るなら話しかけて生の声を聞く。彼女達は、明るく思考がpositiveで、積極的でそして魅力的です。第一線で活躍しているから、ともいえるでしょうが、裏をかえせば、女性だって子供がいたって第一線でやっていけるといこと。遠くても近くても彼女達を観察する、そして接する機会があると、自分にもできる!と思える様になるかもしれません。

日本には現在、分野を問わず、女性を起用しましょう、女性率を30%まで上げましょう、という動きがあります。日本の人口は減少の一途をたどっており、若年層も減少しつつある、それを補うための策略ですが、“女性の声を聞く耳持たない現象”がここでもおきていて、なんとなく可笑しく思えます。研究を続けたい、研究者になる、家庭をもつ、あるいは母になるということを選択できるということは何と恵まれたことでしょう。そうしたければそうすればいいし、そうしないと決めることも勿論出来るのです。ただ、一旦そうする(なる)と決めたら、

ATPは少なからず要る。ですが、これはどの世界でもどの分野でもほぼ同じ。ライフサイエンスに限ったことではないこともここに記しておきます。

女性が、男性が、自分がどうしたいのか、どうなりたいたいのか。生の声をどんどんひろいつつ現状を理解すると共に、多くの人にとってよりよい研究環境が整うことを願っています。

キャリアパス委員会
委員長 塩見美喜子

【セッションI：キャリアパスの多様性と可能性】

●日時：2013年12月3日(火) 11:45～13:00

●会場：神戸国際会議場 3階 国際会議室

●講演：

「ベンチャー起業「夢と野望」の心得とその功罪」

菅 裕明(東京大学大学院理学系研究科)

「大学発ベンチャーへの起業・事業開発に対するVCの役割」

片田江舞子(株式会社東京大学エッジキャピタル)

本年度のキャリアパス委員会主催のランチョンセミナーは2つに分けて開催されました。一つはキャリアパスとしてのベンチャー企業について知ろう(セッションI)と言うもの、もう一つは研究テーマについて考えよう(セッションII)でした。超満員となったランチョンセミナーの参加者は、約400名(内訳：会場着席350、立見50)で、このうち、セッションIでは「235名」の方がアンケートに協力下さいました。アンケートの結果はとても面白かった、まあまあ面白かったと言う意見を合わせると前半の講演も後半の議論も7割を超えており、総じて好評だったと言うことが出来ると思います。また、このような試みを続けるか否かについても8割の人が是非と回答していることから、企画した側としては一安心しました。個別の意見の中にはやや辛口の意見も見られますが、概ね「ベンチャー企業に対するイメージの変革」につながったと言う回答が多く、これも当初の目的を達したと考えております。この場を借りてあらためて話題提供いただいた片田江様、菅先生に感謝します。

今、日本では政府主導でより応用面を重視した方向へ研究のあり方が変えられようとしており、我々基礎研究者はそのことに異を唱えつつも、時代に合わせて自分の研究のあり方、売り込み方を必然的に考え直さなくてはならない局面に居ると思います。そういう意味でも、今回のセッションは良い話題提供となったのではないかなと思っております。来年度以降も、また形を変えつつ、キャリアパスについて様々な方向から再考して行きます。引き続きよろしく申し上げます。

(文責：座長・白髭克彦)

【セッションⅡ：21世紀のアカデミア、君たちは何を指す？】

●日 時：2013年12月4日(水) 11:45～13:00

●会 場：神戸国際会議場 3階 国際会議室

●講 演：

「未来を見通した研究テーマの選び方」

堀田 凱樹（東京大学名誉教授）

昨年の「コミュニケーション、プレゼンテーションの達人になる」（通称コミュプレの達人）を受けて、年会二日目のセッションでは、プレゼンテーションの内容、つまり研究テーマについて考えてみました。研究者を目指す若者にとって、研究テーマを何にするかは、非常に重要な問題です。シンポジウムの前半では情報・システム研究機構の元機構長で東大および国立遺伝研名誉教授の堀田凱樹先生に基調講演をお願いしました。堀田先生ご自身、将来を見越した発展性のあるテーマを常に模索されていたそうです。研究室選びでは学内外を問わずいろんなボスに会いに行き、また論文を読み、それがその後大変なためになったとおっしゃっていました。与えられたテーマをただやるのではなく、自分で調べて考えるという努力を今の若者にもっと期待されています。ご講演の内容については是非全文記録（HPに掲載）をお読みください。大変なめになります。

また、セッションの後半で行いましたパネルディスカッションでは、ケータイ端末をつかって会場の意見を聞きながら研究テーマの選び方について考えてみました。アンケートサイトには多くのアクセスがあり大変盛り上がりました（会場参加者400名）。練習設問では会場の皆さんの属性を伺いました。やはり「若手（学部学生、大学院生、ポスドク）」が68.5%と多かったです。設問1) 所属研究室を選んだ理由は？では、「テーマや興味で選んだ」が61%でした。健全な結果だと思いますが、私が学部4年生だった頃を思い出すと、選ぶ段階でどのくらいその研究室のテーマ（内容）を理解していたかは、疑問です（笑）。「PI（ボス）で選んだ」は13.6%でしたが、実はもっと多いと思っていました。PIの人柄や研究に対する情熱は研究室選択の大きな要素になると思っておりましたが、案外気にしてないんですね。設問2) 研究テーマに満足していますか？では65%の方が「満足している」と答えています。「満足していない」、「どちらともいえない」の計32.3%を大きく引き離しています。設問3) 満足している理由は「面白い、興味をそそるテーマ」が一

番多くなっています。逆に設問4) 満足していない方の理由は様々でしたが、「部分的で一貫性がない、他の人のお手伝い的なテーマ」が22.8%と高率なのが目立ちます。これに関してはPIの責任が重いですね。次に設問5) 研究室や分野の変更についての考えを教えてください、では66.5%が「もっと面白い分野があったら積極的に変更したい」を選んでいました。パネリストからの意見にもありますように非常に健全だと思います。実際に変更するには勇気と強い意志が必要だと思いますが、是非実行してもらいたいです。それで設問6) 現テーマの将来性の有無、についてもお聞きしました。「将来性がある」は「ノーベル賞級の将来性」と合わせて64.6%とかなりの高率です。すばらしい！母集団が当セッションに参加するようなモチベーションが高い若者ですから、個人的には「ノーベル賞級の将来性6.4%」がさらに高いとよかったです。もっと遠慮せずにノーベル賞を狙ってください。続いての設問7) 将来やりたい研究テーマを心に秘めている？では、「はい」が48.9%と約半分。「いまはまだないが、必要性は感じている」が35.2%。合わせて84.1%。これは大変楽しみです。皆さん、虎視眈々とチャンスをうかがっていますね。是非既成概念を打ち破るような研究テーマを見つけて、実行してください。最後に設問8) 将来さらに発展すると思われる分野は？面白いことに「iPS」、「ヒトゲノム」を抑えて「まだ姿が見えない新分野・異分野融合研究」が29.8%とトップです。まだ何か未知なる大発見があると信じている人が3割近くいます。私も実はその一人です。

さて、全体を総括して「いいテーマ選びとは」堀田先生のお話にもありましたように、特にアカデミックでやっていこうと考えている人は、やはり将来を見越して考えるべきです。誰かが考えた続きをするのは、練習あるいはサイエンスの「作法」を学ぶためにはいいのですが、そこまでは。大学院を修了した段階で、そこから最低30年はこの世界にいると仮定して、生涯にわたって情熱を注ぎ込めるテーマを若い時から模索しておくべきです。また「新分野・異分野融合研究」に期待するのであれば、人と同じことを考えてはダメですね。常に既成の研究分野に対して問題意識を持ち、視野を広げておく必要があります。

私もちょうど50才になり、この世界に入ってから20数年が経過してしまいました。そろそろラストパートをかけなければと感じています。研究者という職業を選んだこと後悔しないために。

（文責：座長・小林武彦）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？	セッション I		セッション II		合計	
① 24歳以下	59	25.1%	68	30.4%	127	27.7%
② 25～29歳	49	20.9%	52	23.2%	101	22.0%
③ 30～34歳	36	15.3%	35	15.6%	71	15.5%
④ 35～39歳	27	11.5%	26	11.6%	53	11.5%
⑤ 40～49歳	39	16.6%	24	10.7%	63	13.7%
⑥ 50～59歳	21	8.9%	18	8.0%	39	8.5%
⑦ 60歳以上	3	1.3%	1	0.4%	4	0.9%
※未記入	1	0.4%	0	0.0%	1	0.2%
計	235		224		459	

【問2】 あなたの身分・職階は？	セッション I		セッション II		合計	
① 学部学生	27	11.5%	25	11.2%	52	11.3%
② 大学院生（修士）	44	18.7%	51	22.8%	95	20.7%
③ 大学院生（博士）	37	15.7%	42	18.8%	79	17.2%
④ ポスドク	28	11.9%	25	11.2%	53	11.5%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	45	19.1%	47	21.0%	92	20.0%
⑥ 大学教員（教授）	14	6.0%	11	4.9%	25	5.4%
⑦ 研究員	7	3.0%	4	1.8%	11	2.4%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	9	3.8%	5	2.2%	14	3.1%
⑨ 企業	17	7.2%	10	4.5%	27	5.9%
⑩ その他	7	3.0%	4	1.8%	11	2.4%
計	235		224		459	

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）	セッション I		セッション II		合計	
① 学会ホームページ	45	17.2%	55	22.0%	100	19.5%
② 年会ホームページ	43	16.4%	48	19.2%	91	17.8%
③ 会報	3	1.1%	3	1.2%	6	1.2%
④ プログラム集	73	27.9%	95	38.0%	168	32.8%
⑤ ポスター	7	2.7%	7	2.8%	14	2.7%
⑥ 会場内の広告	65	24.8%	28	11.2%	93	18.2%
⑦ フェイスブック	1	0.4%	0	0.0%	1	0.2%
⑧ タチコミ	14	5.3%	13	5.2%	27	5.3%
⑨ その他（ランチョンセミナー整理券引換デスク）	5	1.9%	0	0.0%	5	1.0%
⑨ その他（通り掛かり）	2	0.8%	0	0.0%	2	0.4%
⑨ その他（記述なし）	2	0.8%	0	0.0%	2	0.4%
※未記入	2	0.8%	1	0.4%	3	0.6%
計	262		250		512	

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？	セッション I		セッション II		合計	
① ランチョン形式でよかった	226	96.2%	218	97.3%	444	96.7%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	3	1.3%	4	1.8%	7	1.5%
※未記入	6	2.6%	2	0.9%	8	1.7%
計	235		224		459	

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？	セッション I		セッション II		合 計	
①とても面白かった	119	50.6%	150	67.0%	269	58.6%
②まあまあ面白かった	83	35.3%	60	26.8%	143	31.2%
③普通	20	8.5%	10	4.5%	30	6.5%
④あまり面白くなかった	3	1.3%	3	1.3%	6	1.3%
⑤つまらなかった	4	1.7%	0	0.0%	4	0.9%
※未記入	6	2.6%	1	0.4%	7	1.5%
	計	235		224		459

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？	セッション I		セッション II		合 計	
①とても面白かった	97	41.3%	67	29.9%	164	35.7%
②まあまあ面白かった	71	30.2%	96	42.9%	167	36.4%
③普通	40	17.0%	24	10.7%	64	13.9%
④あまり面白くなかった	4	1.7%	14	6.3%	18	3.9%
⑤つまらなかった	1	0.4%	3	1.3%	4	0.9%
※未記入	22	9.4%	20	8.9%	42	9.2%
	計	235		224		459

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？	セッション I		セッション II		合 計	
①是非続けるべき	188	80.0%	167	74.6%	355	77.3%
②続けるべきだが方法を変えた方がよい	24	10.2%	41	18.3%	65	14.2%
③やめた方がよい	0	0.0%	1	0.4%	1	0.2%
④わからない	13	5.5%	9	4.0%	22	4.8%
※未記入	10	4.3%	6	2.7%	16	3.5%
	計	235		224		459

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

〈セッション I〉

- ・ベンチャーキャピタルとベンチャーの関係、ベンチャーとラボとの関係がよかった
- ・支援する側、される側の実体験が本人から聞けて面白かった
- ・ベンチャー、産学連係の仕組みを学ぶことができ、良かった
- ・普段考えないような、ベンチャー企業の意義についての話を聴くことができ良かった
- ・基礎研究をビジネスにつなげることが苦手な日本において、大変参考になる話だった。MOTを勉強しているので、面白い内容かつ刺激的だった
- ・ベンチャー企業へのイメージが変わった。社会ではそれこそ Google や Apple などの大成功例しか知ることができないので、実際に近い分野で地に足の着いた成功（またはそのステップアップ）例を知ることができるのは実感が得られ、大きい
- ・ベンチャー企業に関わる方々のお話を聞く機会がなかったので、大変興味深かった
- ・日本のベンチャーが育たないと言われている環境が改善されていく可能性を感じられた
- ・VC にあまり馴染みがないので、とても勉強になった
- ・研究をしている中で研究成果が社会に還元出来たらどれだけ素晴らしいだろうと感じることが多くあります。そのような中、ペプチドリームのような成功した会社が存在することに非常に希望を持てる感じた
- ・ベンチャー企業とその周囲の成り立ちについて、漠然としてしか知らなかったが、システマティックな計画を立てて成功していると聞き、これまでのイメージが必ずしも正しくないのだと思った
- ・ベンチャー企業に関することは素人の知識だったので、どの程度リスクなものか分かり、興味深かった
- ・ベンチャーキャピタルの方のお話を伺うことはこれまで無かったのでとても新鮮だった
- ・ベンチャーに入るのは自己責任。教員が指導する様なものではないというのは、その通りだと思う
- ・ペプチドリーム社の設立経緯についての説明はすごくためになった
- ・ベンチャー起業の実態をご本人から聞く機会がないので興味深く、面白かった
- ・ベンチャーのことを詳しく知らなかったので、いい機会だった
- ・東大の TLO はすごいと思った。ベンチャーのなり立ちがよく分かっておもしろかった
- ・UTEC の存在を知れて良かった
- ・前半の講演で、もっと深い話があると良かった。キャリアパスの可能性の1つとして、ふわっとした表面的な理解ができただけに思える
- ・前半部は特に新しいことはなかった。後半部は一つの成功例と個人の考え方がきけて、おもしろかった
- ・前半:CUについてよく分かっていなかったため、わかりやすく理解できました。後半:ベンチャー立ち上げから今までのこと、ほとんど知らなかったため、とても面白かった
- ・講演などで、もっとベンチャーのネックや失敗の例を多く示してほしい。それにより、成功の話が、何が必要かが見えてくると思う

- ・ベンチャー企業の成功例、失敗例を出して欲しい
- ・PeptiDreamという具体例がきけてわかりやすかった。失敗例があればよかったかも
- ・1人目の方に質問して、答えてらう形で、良い話がきけた。講演がよくなかったのはパッションなかったから。菅先生、具体的で非常に良かった。司会、いろいろな話をひきだして、うまかった
- ・ビジネスとサイエンスのインタラクション方法を話して頂いたのが（聞いたのが）初めてでしたので、興味がもてました。このようなHow toの話って貴重だと思った
- ・アカデミックな話だけでなく、このようなビジネスの話を開け、新鮮だった
- ・ベンチャーの話聞き、すごく興味を持っていました。今就活しているので、今日のセッションを聞き、少し考え直し、企業を選ぶ時、ベンチャーみたいところに仕事ができたらでもかなりいいと思った
- ・非常に参考になる話で、普段考えないでいることを考える機会になった
- ・今後の事を考えるために、とても興味深いお話を聞くことができ、とても良かった
- ・アカデミア、大学における産学連携にあり方について、学会から提言できるようになれば、素晴らしい。←自分の研究室をベンチャー企業として見る/みなしている教授が多くなっているのでは？
- ・アカデミックと企業の住み分けを厳密にしていこうと思った以上に重要なんだと思いました。その分、アカデミックと企業との距離が近かった、ということに驚いた
- ・実際に大学の研究者の方で起業された方のお話が伺えてよかったです。産官学、ラボ内は私もわかるべきと共感した
- ・起業までの流れから、就職時のメリット、デメリットが聞けて良かった
- ・起業したいという気持ちが少しでもある学生の背中を押すものでした。具体的にイメージすることができた
- ・ベンチャー業界の成熟や流動的な雇用への慣れのようなものが求められているのかなと思った
- ・ベンチャーに向く、向かない基礎研究というのは、現場の人間には判断がつきにくい、VCとラボの関係がより緊密である必要があると思う
- ・生の起業者の声が聞け、興味深い内容だった
- ・後半のディスカッションで、ベンチャーに対する参加者の理解が低く、驚いた
- ・研究とビジネスは違うということは、その通りと思った。産学連携の話の無理さ加減を何とかしてもらいたい
- ・普段聞くことがない起業について具体的な話を聞くことができてよかった
- ・リスクに対しての何らかのセーフティネットなり、生き残るプランなりの観点についてあまり語られ語られていなかった気がした
- ・失敗した人の話等も聞きたかった。発明者（学生）やベンチャーで働いている人からの意見も聞きたかった
- ・パネラー（質問する側）があまり議題に興味をもっているように見えず、盛り上がり欠けていた。回答側はとても良かった
- ・ペプチドなど成果＝商品となりやすい分野でのベンチャーは立ち上げやすい（投資されやすい）と思いますが、成果から商品化までに時間がかかる分野でのベンチャー立ち上げは可能か、あるいは商品化までの時間軸の間のサポートはあるかどうか、などを知りたいです。難しい事例も示してもらえるとより良いと思った（成功例は2/10程度とのことなので）
- ・詳しく、具体的に、知らない世界が知れて良かった。ベンチャーへの偏見が無くなった
- ・研究と企業を興すという事の難しさがよく分かった
- ・初めて知る内容ばかりでとても興味深かった
- ・演者もパネラーも良かった。分生では本音が聞けて良い
- ・初めて聞く話ばかりだったので楽しかった
- ・面白かった。これからの研究者は自分でお金を生んで行く事が必要だと思っている
- ・具体的にベンチャーに適する（実際に会社として成功している）技術の内容について知れたかった
- ・ベンチャーに対する見方が変わった。大変興味深かった
- ・演者の先生、素晴らしかったです。塩見先生のつつこみでさらに理解が深まった
- ・ハイリスクをとる勇気が大切であると思った
- ・どんなトピックもそうですが、すんなり成功した例を挙げるセミナーよりも、苦しんだけれど成功したという事例を挙げてもらう方が良いと思う。現実すんなり成功する人達ばかりではなく、このような事例ばかり挙げていても学生やポスドクに対してプラス効果は限定的と思う
- ・現在TLOに相談中なのですが、今後UTECHに問い合わせたい
- ・私自身が研究成果よりもやはり社会に直接還元できるように働きたいと改めて気づききっかけになった
- ・普段考えないことで勉強になった
- ・「アカデミア研究を守るための企業」というのが印象的でした。製薬企業の研究は、研究に特化しがちなので、多種多様な仕事に携わることができるベンチャーに、ある種憧れる面もある
- ・研究者として、研究だけに終わりたい身にとっては、ベンチャー企業に入社するのは非常に良い選択肢だと思った
- ・話は興味深く、つつこんだフランクなところが良かった。しかし、パネルディスカッション、ほとんど教授さん達…。ポスドクでベンチャーで働いている人の意見も聞きたかった
- ・キャリアパス委員会で、色々な業種のお話をされるのはとても良い試みであると思った
- ・セッションを通して、ベンチャー企業に興味を持てた
- ・各分野（経営、マーケティング、研究）の専門家をまとめる力、会社の雰囲気を作れる人がトップに立つべきかと思った
- ・難しいとは思いますが、どういうベンチャーが成功しやすいのか、傾向を分析している資料があれば、面白いと思いました。日本におけるサイエンスの方向性とも大きく関係してくると思う
- ・思ったよりフランクな議論で面白かった
- ・とても面白かった。複数の企業の例が出ているとさらに良かった
- ・菅先生の話が分かりやすかった
- ・菅先生の人柄の良さがわかった
- ・後半がすごく良かった
- ・アカデミアとビジネスの分けについてとても勉強になった
- ・セミナーチケットがとれなかったのが偶然参加したが、非常に面白かった
- ・ベンチャーに対する理解が深まった
- ・キャリアパスはどんな物かよくわかった
- ・博士を取った後の興味深い話だと感じた
- ・就職活動を行っている立場として、大変参考になった
- ・新しい試みで良いと思う

- ・異なる視点を持ったので、他の人に伝えたい
- ・普段聞けないことが聞けて良かった
- ・研究以外ビジネスに関するテーマで半日セッションを組んで頂いたら面白いと思う
- ・テーマとしては面白かったが、“キャリアパス”には直結しない気がした
- ・ターゲットが不明。会員に広く「ベンチャー起業」を紹介したいのか？もっと人数を減らして、「ベンチャー起業」に興味のある人だけを集めてやったほうが良い。参加者のほとんどは他のランチョンセミナーに入れなかったからここにいるように見える
- ・パネラーの質問が的外れのような気がした
- ・ディスカッションが長いので、もうちょっと自由に参加できるようにしてほしい
- ・パネリストの人選を工夫してみても良いのではないか
- ・修士の私には少し遠い話題だったかもしれない
- ・1つのテーマに絞られ過ぎている。もっと広いテーマを扱ってほしい
- ・演者が話すだけでなく、討論があったのはとても良かった
- ・研究者は、ビジネスを理解していない、よってベンチャーはうまくいかないと思う
- ・会場からの質疑がもっと活発にできる形式が望ましいかと思った
- ・自分には無理かな？
- ・すばらしい成功例。少し遠い話かな
- ・大事なテーマ、美味ランチョン！
- ・次回も期待しています
- ・大変勉強になりました
- ・大変興味をもちました
- ・非常におもしろかった（同コメント計2件）
- ・ありがとうございました（同コメント計3件）
- ・とてもためになりました！
- ・参考になった
- ・良かった（同コメント計2件）

〈セッションII〉

- ・研究してる人は、多かれ少なかれ迷いを抱えている。こういうセッションはその一助になる
- ・エスタブリッシュされた方の業績はよく見聞きするが、考え方を聞けることはあまりないので、面白かった
- ・今後の実験研究をまず考え直そうと思った
- ・自分の興味と将来性、やはりどちらも重要だと感じました。「自分が不便だと感じる事をテーマのヒントに出来る」という話は、すごく納得できる話だった
- ・将来の見通しをしっかりと考えるのが大切なんだと改めて感じた
- ・研究者の方々が気づいたことを聞けることが出来たので、とても有意義だった
- ・将来の自分について、今から見通す機会を与えてくれるという点で、非常に有意義だった
- ・研究者が自分の研究テーマをどのように考えて選択してきたかを聞く機会が得られて、非常に参考になった。特に学生、大学院生に良いヒントを与えたのではないだろうか？
- ・今後の研究生生活を行っていくに当たり、数多くの参考になった「自分が育つ良い人材を育てる」
- ・若手皆が共通して不安に思う事が多いテーマだと思うので、非常に良い試みだと感じる
- ・堀田先生のような大先生に、昔どのようにして研究テーマを選択したのか伺えたのは良かった
- ・さすが堀田先生です！これまで生命科学の研究の歴史と2053年に起こる革命の予測まで非常にスケールの大きい話をユーモアを交えてお話下さり、感銘を受けました。1日目にもこのようなベテランの科学者のこれまでの歩みを含めたお話を聞きたかった
- ・面白いと思ったことはとことん。金も重要だが、やっぱりこれ！
- ・50年ベースの考え方というのは、楽しく、若い方にも魅力的かと思う
- ・どうやったら、自分の一生をかけて研究したいテーマに巡り合うか、ということだが、多くの院生は、1～2年でそのようなものに出合えなければ、就職の方向に流れてしまう。これを止めない限りは、研究者数の減少は激しくなると思う
- ・長期的なテーマを見据えて、今のテーマを決めているのだなあー、と思った
- ・自分の進む道のコンパスを手に入れた気がする
- ・年會に参加（発表）している学生等は、現在のテーマにあまり不満がないのでは。むしろ参加出来ない学生等の意見を聞きたい
- ・複数人のお話を聞けるともっと良かったと思う。堀田先生は、とてもしっかりされているので、大変聞きやすく、面白いお話だった
- ・前半のお話は、非常に面白かった
- ・前半の堀田先生の話は面白かった。後半のディスカッションでは、パネリストの方々が割と教科書的に優良回答をしていて、面白みが小さかった
- ・様々なバックグラウンドの先生方のパネルディスカッションは多くを学ばせていただいた
- ・後半の話が楽しかった。コメント出るのが◎
- ・他の学生等の意見が聞けたのが良かった
- ・設問を見て「満足」している人が多くてびっくりした。今後も開催してほしい
- ・学生の無知で素直な本音が結果として表れたのではと思った。だから先生方の指摘及び正直な話が面白かった
- ・“博士へのキャリアパス”かと思って聞きに来たが少し違った。具体的な“将来性のある（と思う）研究テーマ”がどんなものか聞いてみたかった
- ・皆さんの簡潔で濃縮されたお話がとても面白かったです。最前線の方々は人柄的にも魅力的なのだと思います
- ・他者（研究者）の意見を聞くことができ面白かったです。次回もこのようなセッションが増えると嬉しい
- ・これから伸びる分野にもっと冒険があっても良かった
- ・同じく研究に励む人達の自身のテーマについての本音を聞けて面白かったです。アンケート形式の進行も楽しく、飽きることなく聞けた
- ・個人的なことを聞くことができたので良かった
- ・Webでの参加システムは非常に面白かった

- ・他の人のコメントが面白かった。もっと本音を聞きたい（参加者もパネリストの方も）
- ・名大の先生、石井先生が一番まとも。石井先生の最後のコメントすばらしい
- ・会場でのコメントにもあったが、ある程度積極的になれているヒトの集団である可能性が高ので、集計はそこを考慮すべきかと思います。会場でのコメントで、生な声を知れたのは、良かったと思った
- ・後半が面白かったので、来年も参加したい
- ・スマホを使うというのが新しいと思いました。参加型は良いと思う
- ・アンケート形式で面白かった
- ・私と立場が違う人が多いので、若い人でやる気のある人が集まっていますね
- ・参加型のセミナーが面白かった
- ・思っていたより面白かった
- ・セッションの設定はとても健全。科学者からの発信としては正統的で良かった。一方、基礎科学を守り、発展させるための政策提言にどう反映させるかが課題
- ・他の人の意見が聞けて良かった
- ・参加型で面白かった
- ・普段聞けない話が聞けて有意義だった
- ・普段自分で気づかない問題が提起されて良い機会だった。リアルタイムコメントは面白かった
- ・Real time でコメント出来るのがとてもいい
- ・研究者が意識し、考えるべき課題だと思うので、やるべきセッションだと思う
- ・勇気もらった
- ・これからまた頑張ろうと思った
- ・後半、リアルタイム（参加者の）アンケートを取り入れたのは、面白い試みと思う。参加している、という気がして、楽しんで参加できる。テーマに満足している人が65%でホッとした
- ・全体的に面白かったが、もっとコメントに対してつっこんだディスカッションがあれば、楽しかったかなと思った
- ・後半の議論が消化不良のように思いました。コメントに対してもっと対応しても良いと思う
- ・コメントがリアルタイムで見られるのがとても面白かった。なので、そのコメントをもう少し取り上げてもらえると、もっと参加できると思った
- ・聴衆参加型は良いと思うが、ディスカッションになっていないと思った
- ・面白いコメントをもっと拾ってほしい
- ・ディスカッションがあまり盛り上がっていなかった
- ・パネリストのコメントが無難で面白くない
- ・コメントがたくさんあるのだから、もっと拾ってください。パネリストの話が聞きたいのに、全く無かった
- ・当たり障りのないことが多く、根本的なところには触れていなかった（PIになれない人は？とか）
- ・いい話で終わってあまり踏み込んでいない
- ・もう少しコメントを拾う時間があればもっとよいと思う
- ・色々な人の意見が見れて良かった。もう少し、コメントに対して触れてほしかった
- ・ディスカッションの時間、話を聞く時間をもっとあると良かったです。コメント言及時間が少ないように感じた
- ・後半ディスカッションが、コメントがほとんど生かされてなかったのが気になった。自分の考えだけを述べるのではなく、質問に答える形をとらないとこのセッションの意味がない。何に面白かったのかも
- ・もう少しコメントを取り上げないと、あまり意味がないのでは？
- ・コメントに関してあまり触れていないと思った
- ・コメントに対す手、もっとパネリストは意見すべき。コメントをとる意味なし
- ・コメントへの回答をもっとすべきではないか？
- ・後半の段取りが悪い。コメントへのパネラーの反応があまりなく、インタラクティブになっていない。スマホで site をアクセスしても対応していないと〇〇〇あまり〇〇なディスカッションになっていない印象（想定内の反応、コメントばかりでつまらない）
- ・表面的な回答ばかりで、悩んでいる人のヘルプにはならなかったと思う
- ・意外と面白かった。ノウハウ的もありがたい。より深く議論される様に成長してほしい
- ・もっとコメントに触れてほしい。こういう問題を真面目にPIの方々が話している場を見れて良かった
- ・コメントについて、もう少し取り上げるべきものがあつたと思う
- ・コメントをうまく拾えていない。メイン司会がイマイチ。岩崎さんあたりの方が良い司会になれたのでは？
- ・せっかくコメントがみられるのであれば、もっと取り上げてそれについて議論してほしい
- ・質問をもう少し増やしても良いのでは？
- ・コメントをもっとたくさん拾ってほしかった
- ・後半は手法は面白い。ただコメントと先生とのやりとりが多かったかは疑問。コメントがある分、ダイレクトなやりとりの時間も設けられていないし、時間が短いため仕方ない配分かもしれないが
- ・先生の話が良かった。ただコメントについて、より多く触れ、そのコメントに対するコメントで終わるのではなく、議論に持って行くと良かった。またその時間を長くするべき
- ・会場に向けて、何についてコメントをほしいのか明確に propose した方が、より有意義なコメントが多く得られたのではないか
- ・コメントの取り扱いのテンポがよくない。テーマは面白かった
- ・アンケートの結果よりもリアルタイムで寄せられるコメントの方に注目してもっとパネリストからの意見を聞かせてほしかった
- ・会場との対話がない
- ・パネリストのコメントももっと聞きたかった。ありがとうございました。
- ・後半はちょっと… テーマに挑戦しなきゃいけないのは自明なのだから、それをどう立てるかとかをもっと聞きたかった
- ・PIとは何ですか？
- ・私はボスの立場として、学生や大学院生さんの気持ちがあつて今回良かったと思う
- ・ランチョン券がお弁当と引換えに無くなったので、QRコードを撮るタイミングがギリギリでした。スライドも投票結果で使っているので、アドレスを常にどこかに表示してほしいです。入りそびれた方が困っていた
- ・ありがとうございました。楽しかった
- ・小林さん、お疲れさまでした

- ・ポジションを得る際、グラントをとる際の年齢制限が将来に対する不安を助長していると思う。アカデミアは職業として敬遠されても仕方ない
- ・イントロだけでも簡単に他分野の常識や、基本を楽しく知れたら嬉しい→出来ること、出来ないことなど
- ・ケータイを使った議論は面白かったが、テーマは特に魅力的にうつらない
- ・小林先生の司会が良かった。堀田先生の存在がよい
- ・前の字が小さくて見えなかった
- ・コメントをもっと有効活用してください
- ・昨年に続き、このセッションは良いと思う
- ・あまりまとまりのないセッションだったと思う。漠然としていた
- ・「エアプロジェクトを考えておく」というのは、若者へのいいメッセージだと思います。コメントにもありましたが、せっかくコメントを書いてもらっているのに、それについても、もう少し言及する方が良いと思う
- ・月並みな意見が多かった
- ・回答はできるが、なかなかコメントしづらい
- ・切り口は変えてもよいかも、たぶん結果は同じだから
- ・将来に対する、科学のあり方を考えるきっかけになった。面白い取り組みだが、まだちぐはぐ。これからも改良し続けてほしい
- ・リアルタイムでアンケート、コメントを募る形式は面白かった
- ・面白いセッションだと思いましたが、「キャリアパス」のランチョンとは違う気もした
- ・建設的なディスカッションだったとは思えません
- ・博士一泊スドクでターゲットをもっと絞ってやってほしい。又は、立場を分けてデータを出したのを見たい
- ・参加者の属性ごとにアンケート結果をソートすると、面白かったかも。コメントはネガティブなものが多かったので、それを元に会場とコメントーターとの間のコミュニケーションは正直とれていなかった気がする
- ・Twitterの方が、気軽に書き込めると思う
- ・ネットをつなげる環境をもってないので、参加出来なかった
- ・意欲的な企画だと思いましたが、アンケート結果が平凡で少し残念でした。やはり学会に来ているのは、ハッピーな人が多いですね。パネリストの方々の話はとても面白かったです。寄せられた負のコメントについて、もっと議論を深めてほしかった
- ・後半の時間を増やす。送られたコメントに対して、パネラーがコメントを返す
- ・画面が遠くて見にくかったので、手元のiPadでも見られると良かった
- ・アンケート選択肢が選びにくいものがあった
- ・事前にアンケートをとってからのの方がよいのではないかと思います。プラス、今回のようなコメントを集める感じで
- ・面白いので、もう少し時間をとってゆっくりやってほしいです。コメントの字が見えないので、次回はもっと大きくしてください
- ・時間が短い、コメントが取り上げられていない
- ・ちょっとトピックがばらけてしまったかもしれませんが。テーマが壮大だったから仕方ないのかもしれませんが
- ・わざわざ1時間15分もの時間をさいて聞く話ではなかった
- ・スライドのコメントの字が小さくて読みにくい
- ・画面に反映されるのが、より速いと良い
- ・学生のみで企画、司会をさせたら、もっと盛り上がると思います
- ・参考にはならなかったが、面白かった
- ・もっと長時間やっても面白そう
- ・時間が足りない
- ・斬新で面白かった
- ・ためになった
- ・面白かった
- ・楽しかった

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあればお教えてください。

〈セッションI〉

- ・ベンチャーキャピタルの評価シート等を知りたい
- ・ベンチャーの実際の立ち上げから、開発段階をもう少しわしく話してほしい（キャピタルの人に）
- ・ベンチャーの目標
- ・ベンチャーとして成功した後、さらに企業を成長させるために考えるべき事
- ・ベンチャー企業で働いている研究員の話が聞きたい
- ・ベンチャーキャピタルの判断基準がもっと知りたい　なぜベンチャーAは成功してなぜBは成功しなかったのかのケーススタディ
- ・ベンチャーで働く研究員の話
- ・ベンチャーに興味のある起業したい人を集める
- ・ベンチャーはまた来年も聞きたい
- ・学生向けにもベンチャーの良さを伝えてもらいたい
- ・今年同様ベンチャーの関係のテーマ
- ・同様に大学とベンチャーについて
- ・同じテーマで、異なる事例を、複数
- ・今回のような企画を継続的に実施してほしい
- ・成功例だけでなく、失敗例も知りたい
- ・キャリアパス（アカデミア、ベンチャーなど、研究分野以外への就職先について）→博士取得＝サイエンス分野で生きなくてはならないと思いきこんでいる博士が多すぎる気がする
- ・大学におけるキャリアパス
- ・アカデミアに残り続けるキャリアについて

- ・アカデミックでのサバイバル
- ・PD、博士の実際
- ・D卒の就職の実際
- ・博士課程卒業後の間
- ・D修了以降の留学や就職の問題。どう選ぶか、どのようにコンタクトを取るかなど（D生の就活？）
- ・PIになるには？（体験談）、大学（アカデミア）における男女共同参画
- ・鳴かず飛ばずで終わりそうなポストドクの将来は？
- ・助教ポストをいかに増やすか、基礎研究費をいかに増やすか
- ・日本ももっと転職がスムーズにいく流れを作れるとか、やはりベンチャーは潰れるとか前提だとそれが大事になると思う
- ・単なる“研究”ではなく、将来的なマネージメントのやり方、学び方のようなテーマを取り上げてほしい
- ・リサーチ・アドミニストレーターの方のお話が聴きたい
- ・どうやっていい研究、将来的に役に立つ仕事を見つける？
- ・サイエンスコミュニケーション、Dr→企業 or アカデミア以外への就職など
- ・製薬、食品企業が求める人材像（修士・博士）
- ・研究の臨床応用について
- ・女性研究者のキャリアプランなど
- ・分子生物学の歴史などについて
- ・大学教員の年限（期限）について？
- ・特許の取り方
- ・失敗談

〈セッションII〉

- ・今回の2日目のようなベテラン研究者の小講演の後、Web参加型の討論会と行うことを学会中の昼に2回やるのが良いのでは？
- ・同じテーマで良いと思う。毎回違う人が違う視点で、この大事なテーマを扱うと面白いと思う
- ・先人の方々の考えや、アドバイス、提言を聞ける。参考になり、ありがたい
- ・今回、お金、学振などの話、コメントが多かったので、それ系の話をしたい
- ・博士課程学生、ポストドクの今後のキャリアパス
- ・引き続きベンチャーや起業について
- ・実際に未来のプロジェクトを立てる企画 卓上→未来のプロジェクトのラフ画等を描いてみる
- ・研究に行き詰まった時、どうそこから打開策を見つけているのか
- ・凡人が生き残るためには
- ・それぞれの分野の最前線の人の経歴と内容を短時間に知るセッション
- ・研究テーマ（の分野）だけではない点も議論してほしい。例えば、オリジナリティー、研究の影響（他分野への）等
- ・どうやったら研究者として生き残れるか？サバイバル術 いい研究者になるのに必要なテクニックは？
- ・「ボス側の本音」的な どうしても下っ端側が大多数なので
- ・オリジナリティーとは、をもっと突き詰めてほしい
- ・海外で活躍する博士号取得者（企業で働く人、企業を立ち上げた人、若手研究者等）の話を聞きたい
- ・これからの研究をしている人をもっと取り上げてほしい
- ・成功された方の話も面白いですが、失敗して後悔されている方の話も聞きたいと思った
- ・発表が苦手なので特訓したい
- ・研究以外の career path も discussion してほしい。例えばどうやって自分の専門知識を生かすか？
- ・博士-ポストドクのキャリアパスについて
- ・成功した女性研究者のコメントだけでなく、それを支えた周囲の人（ボス、夫）の話も聞いてみたい
- ・研究室内での人間関係で悩む人や、うつでラボに来られなくなってしまう人を救うにはどうしたらいいか
- ・研究者を目指す学生のためのキャリアプラン
- ・No.1で Only one になる方法
- ・予算がない状態でいかにやりたい研究をやるか
- ・研究費のあり方
- ・実験データの再現性・信頼性についての教育セミナー
- ・モチベーションの上げ方
- ・失敗事例集（ラボライフでも研究でも）
- ・みんなの悩んでいることを聞かせてほしい
- ・大失敗した人の話を聞きたい
- ・分子生物学に将来性はあるのか
- ・ポストドクの間
- ・“挫折”、“劣等感”からの復活、逆転
- ・医師等
- ・数学・物理学者交えたセッション
- ・ラボ運営
- ・女性研究者として成功するためのチップス～（若手男性でも良いけれど、違いがあるのでは？）そこを掘り下げていただければ
- ・女性研究者について。出産と研究の両立
- ・留学の話、留学後の話
- ・研究テーマと倫理に関して
- ・分子生物学の重鎮たちをどう引きずりおろすか、とか
- ・適当なことを言うPIをどう処するか
- ・一緒に配られた女性比率の話は…？

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・ 女性は研究に専念する時間的制約が多いため、結果的に成果を出すのに時間がかかり、ポストを得られず上位職につけないため、オーガナイザーやシンポジウム演者に選ばれないのだと思う、成果が出せる様なサポート（人的、金銭的）が必要だと思う
- ・ ラボを運営するような立場の女性（教授等）を積極的にオーガナイザーやシンポジストに入れて、若い女子研究員にロールモデルを示して欲しい
- ・ 思っていたよりも女性が少なく、シンポジウムとかへの参加も少ない
- ・ 面白い分析
- ・ まだ女性が少ない、大学教員の女性比率を上げる必要がある
- ・ 自分自身（女性）が崖っぷちな気分なので身につまされる
- ・ 今年はワークショップへの公募枠がなかった、スピーカーの女性比率は公募枠を増やして、応募できるチャンスを均等に与えることによってこそ増加する可能性が開けると思う
- ・ 女性を増やすならば制度面で女性が研究できるサポート、託児所や給与体系の改善が必要、技術職が事務職的に長く働けたり、キャリアとして技術職を認める仕組みもあると思う
- ・ 確かにシンポジウム、ワークショップにおける女性の比率は少ないと思う、それはPIの割合が少ないことを反映していると思う
- ・ 女性の方が忙しいのか、オーガナイザーなんてしている場合でないという心境の人もいるのかも、女性オーガナイザーを増やしたければ、連絡と調整を学会でサポートするとか、強引に指名するとか？
- ・ 女性が少ないことは理解していたが、海外と比較すると極端に少ないことがより理解できた、今後は私を含めた女性研究者の活躍を期待する
- ・ やはりまだまだ女性の進出が進んでいないと感じた
- ・ 全体的に女性研究員が少ないことは感じている、女性研究員を増やすために、女性が研究しやすい環境を作らなければならぬと思う
- ・ 女性がまだまだ少ない、修士から博士に進学する学生を増やしたり、ポスドクからポストを得る女性研究者の数を増やすことが重要
- ・ 女性が増えたとよい
- ・ 女性研究者や教員の増加が見られないので残念
- ・ 女性比率が少ないのは何故か？
- ・ 上級職になるほど女性が少ないとあらためて感じた
- ・ ワorkshopやシンポジウムのスピーカー＆オーガナイザーに強制的に女性を入れるのはどうかと思う
- ・ スピーカーの男女比率は、スピーカーを選ぶオーガナイザーにも大きく依存していると思う、オーガナイザーには女子も応募・採択されやすい工夫も欲しい
- ・ 女性比率の低さに驚いた
- ・ まだまだ女性比率が低い、女性にもっとチャンスをあげて欲しい
- ・ どの学会でも、大学院生までは女性がある程度いてもその後が少ない
- ・ 就職（研究職など）の段階以降女性はぐっと減るのだと思った
- ・ 年齢が上がるほど男性の割合が高く、女性が少ないと感じた
- ・ 女性の場合、出産や育児で30代以降のキャリアが切れがちだと思う、もっとワークライフバランスを考えたキャリアパスが欲しいとあらためて感じた
- ・ 女性の比率が思ったより低くて驚いた、女性研究者が研究しやすい環境の整備というのが必要なのではないかと感じた
- ・ 女性発表者が少ないのに驚いた
- ・ 男性のスピーカーがこんなにも多いのだと思った
- ・ 女性会員の学会発表におけるスピーカー・オーガナイザーの比率が低いことは重要なポイントであると思った、論文発表が少ないからだとしたら、それは何故か？活発に研究発表できる環境を整備していく必要がある
- ・ 女性が両親ともに子育てをするのは難しいし、ある程度の年齢まで研究を持続できる人は少ないと思う
- ・ 女性が増えると男性も嬉しい
- ・ やはり女性が1/2になるような学会が分子生物学会だったら、今後の発展が期待できと感じる
- ・ ワorkshop・シンポジウム・オーガナイザーにおける女性比率の低さを再認識した
- ・ 変える（女性を増やす）ためにどのようなことをしているのか示してはどうか？
- ・ ドクター、ポスドクが少ないのが意外だった
- ・ もう少しバランスが良い方がいい
- ・ 興味深い
- ・ 意外に女性が少ない
- ・ おかげで彼女ができない
- ・ 女性はやはりまだまだ少ないのだと思った
- ・ 女性比率を上げた方が良い、（セッションⅡ）パネリストの1/6女性は率が低いのでは？
- ・ 託児所に申し込む利用者の男女比の調査はあるか？
- ・ 大学での職に対する男女比はあまり意味があるとは思わないが、学会として女性のオーガナイザーや座長を増やしていくことは必要かと思う
- ・ 分野のせいかわ女性の割合が少ない
- ・ トップに立った人がヒド過ぎる例が多すぎ、目立つからしょうがないかもしれないが
- ・ 目標の数字を掲げるといよりは、問題提示をして意識レベルの向上がまずは必要だと思う
- ・ 減少した女性が良い職についていれば問題ないと思う
- ・ OK！
- ・ 意外と若年層が多い
- ・ 他の方がどのようなことを考えているかの傾向を見ることができて面白かった
- ・ 想像の範囲内
- ・ 女性の立場から、比率を上げるのはなかなか難しいと思う、男子・女子中高校別学をやめて男女共学にするところから始めるべき
- ・ 細分の専門分野より女性比率が高いことは良いと思う、ただしこれから女性が増えるためには中高生の段階での改革が必要

- ・年代別の女性会員では若い人が多いので、将来的に女性の割合は増える
- ・理系に進学する女性が少ないのでは？
- ・女性が本当にスピーカー・オーガナイザーに値する仕事をしているのか、データはそれを反映しているのでは？性差にこだわらなくて、研究内容や仕事で選ばなければならないのでは？女性だから、男性だからという視点がそもそもおかしい
- ・重要なのは、自由に入れて自由に続けられる事だと思う、やはり男女は違う、しかしやりたいと思ったらできる環境があるべき
- ・女性研究者は充実していただきたい
- ・この業界自体の男女比が違うため、女性の機会が少ないというわけではないと思う
- ・特に女性オーガナイザー、スピーカーを増やす必要性は感じない、そのうち増えるのではないかな？
- ・研究したい人はする
- ・男女比に神経質になり過ぎと思う
- ・男性、女性という性別でなく研究者として性別関係なく評価をして欲しい、性別自体が差別につながるのでは？
- ・(自分も含めて)女性も頑張らなければならない
- ・女性比率が低いことは確かだが、無理に参画を薦める必要はないと感じた
- ・私は女性ですが、無理に起用などをすると逆差別にもなってしまうかなと思った、理系の中では充分参画してるかと思う、皆様の活動のおかげだとも思い、こういった活動は素晴らしいと思う
- ・男女で同じ仕事をするのは難しいので、同じレベルの研究が求められるならば仕方ないことだと思う
- ・女性でもいい研究をしている人は話しているのでは？単にスピーカーを増やすとかそういう問題ではない
- ・女性が少ないのは女性研究者の減少を反映しているので、根本は理系人気の底上げが必要と思う
- ・こういう数字を見て、数字が達成されれば良いのかとやや疑問を感じる
- ・シンポジウムやワークショップで女性が少ないのは今後解消すると思う、性差関係なく選ばれていると思う、女性の参画が増えれば自然と増す
- ・私は女性ですが、女性比率を無理に上げる必要はないと思う
- ・女性PIや管理職が少ないというデータや問題提起は聞き飽きたが、実際それを改善するためのシステムの改良は真剣に為されているのか？周囲の女性研究者は子どもを抱えて止むを得ずアカデミア昇進コースから離れて行っているように見える
- ・女性の割合の低さに女性側の意識がどれだけ影響しているのだろうか？
- ・ポジションが上の人は男性が多い、教授レベルの人たちの発言が多い中で女性が発言するのは少し難しい、また、男性は出世欲があるが、女性はあまりなく、どのような立場でも研究できればいいと思っている人が多いのではないかな？
- ・女性の社会進出は本当に難しい問題だと思う、それを考えている女性は多いが男性はどうだろう？
- ・何が言いたいのか不明(女性参加はいい事だと思うが比率の問題ではないと思う、比率が低いと何故ダメなのですか？高くなると何故いいのですか？)、質とチャンスは別問題として考える方がいいと思う
- ・添付資料、裏表印刷できるなら、もっとまとめの字を大きくしていただければ
- ・細かいデータは見えない、字が小さい
- ・理由部分等がはっきりしていないので、単に数値だけでは分かりづらい
- ・そもそもの研究社会における女性数が何故少ないのかの考察がない、単に男女共同と言っても上手くはいかないはず、分生の会員だけで比べても何の意味も無いのではないかな？
- ・一学会のみ出てきても特に感想がない
- ・そもそも低いことの何が問題なのか、問題を詳細に浮彫にして欲しい
- ・スピーカーにもう少し企業の人が入っても良いのではないかな？
- ・よく分からない、もっと分かりやすく
- ・予想通り
- ・本学会に参加している男女比を気にしたことがなかったので興味深かった
- ・スピーカーやオーガナイザーによって分布に偏りが見られるのは面白い
- ・若手(学生会員)は特にまずはポスターという印象が個人的には強い、少し難しいかもしれないが発表回数と発表枠の移り変わりがどのようになっていくのか気になる
- ・男女の比率ではなく、働きやすさなど研究の世界のあり方を調査してもらいたい
- ・会場の参加者を見ていると、もっと女性が多いと思った
- ・もっともっと学生ばかりでもいいように思う
- ・特に何も感じなかった
- ・生物系学生の男女比率と比べてどうなのかということも知りたいと思った
- ・女性が少ないのは、発表者にPI、ポスドクが多いため、学会というよりアカデミック全体の問題なのでは？
- ・こんな感じと思う、女性が結婚や出産を乗り越えて働き続けるのはハードルが高い、各大学がサポートする取り組みをしているが、それだけでなく学会としてもサポートする必要があると思う

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・もっと会場を広くすれば、もっと参加者が増えるはず
- ・若干、席が足りなかった
- ・会場が少し狭かった
- ・これまでの男女共同参画の企画(交流)の方が良かった。
- ・1日目は受付で参加引換券をもらう時にバイオテクノロジーセミナーの参加引換券を出すように言われました。2日目は、逆にバイオテクノロジーセミナーの参加引換券は必要ないと言われました。→引換券のことにに関して、スタッフの人によって対応が異なり、分かりにくかったので、今後改善を希望します。
- ・お弁当美味しかった
- ・楽しかったです、カニクリームコロッケはカニアレルギーなので、食べれなかった
- ・昼食が美味しくなかった…
- ・景気が良くなるといいな、と思った
- ・キャリアパスは、毎日に昼か夜に1回やった方が良いのでは

〈ケータイアナライズシステム〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問. あなたの現在の属性は？

・学部学生、大学院生	129	58.1%
・ポストドク	23	10.4%
・助教、講師、研究員等の非PI職	34	15.3%
・准教授、教授、主任研究員等のPI職	24	10.8%
・企業、その他	12	5.4%
計	222	100.0%

設問1. 所属している（いた）研究室を選んだ理由は？（※複数回答可）

・テーマや興味で選んだ	175	61.0%
・就職の有利さで選んだ	11	3.8%
・設備や環境で選んだ	40	13.9%
・PIで選んだ	39	13.6%
・その他（くじ引き等の偶然など）	22	7.7%
計	287	100.0%

設問2. ご自身の現在の研究テーマに満足していますか？

・満足している	147	65.0%
・満足していない	27	11.9%
・どちらともいえない	46	20.4%
・いまは特に研究テーマがない	6	2.7%
計	226	100.0%

設問3. 「設問2」で満足していると答えた方に質問です。その理由を教えてください。（※複数回答可）

・面白い、興味をそそるテーマ	149	62.3%
・勉強になる、技術も学べるテーマ	44	18.4%
・論文が書ける、成果が期待できるテーマ	35	14.6%
・その他（コメントください）	11	4.6%
計	239	100.0%

設問4. 「設問2」で満足していないと答えた方に質問です。その理由を教えてください。（※複数回答可）

・面白くない、例えば再現性を見るテーマ	15	19.0%
・実現の可能性が低い難しいテーマ	10	12.7%
・意味不明、やる意義が理解できないテーマ	8	10.1%
・部分的で一貫性がない、他の人のお手伝い的なテーマ	18	22.8%
・その他（コメントください）	28	35.4%
計	79	100.0%

設問5. 研究室や分野の変更についての考えを教えてください。

・研究室（大学）や分野の変更は考えていない	58	26.6%
・もっと面白い分野があったら積極的に変更したい	145	66.5%
・その他（あまり考えたことがないなど）	15	6.9%
計	218	100.0%

設問 6. ご自身（あるいは研究室）の現在の研究テーマに将来性はあると思いますか？

・すごくある、ノーベル賞も夢ではない……………	14	6.4%
・あると思う、このテーマでこれからもやっていけそう……………	128	58.2%
・あまりない、面白い問題は近い将来解かれてしまいそう……………	46	20.9%
・ほとんどない、ボスの趣味にすぎない……………	10	4.5%
・よく判らない……………	22	10.0%
計	220	100.0%

設問 7. 現在のテーマとは違う、将来やりたい研究テーマを心に秘めている

・はい……………	107	48.9%
・いいえ……………	35	16.0%
・いまはまだないが、必要性は感じている……………	77	35.2%
計	219	100.0%

設問 8. 次の中から将来さらに発展すると思われる分野を選んでください。（※複数回答可）

・脳の機能に関する研究……………	61	16.9%
・ヒトのゲノムに関する研究……………	31	8.6%
・iPS 等の再生に関する研究……………	47	13.0%
・食料、エネルギー生産に関わる研究……………	46	12.7%
・コンピュータを使った情報学……………	56	15.5%
・まだ姿が見えない新分野・異分野融合研究……………	108	29.8%
・その他（コメントください）……………	13	3.6%
計	362	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1		堀田節サイコーでした！
2	おとこ	データの話にとられること自体、思考を止めてしまうのではないのでしょうか。
3	凡人その 108	情報を利用しないといけないのはわかるのですが、なかなかパソコンの発展にすらついていけません。どうすればいいですか？
4	おとこ	生物学は結局は化学の現象の奇跡を見ているにすぎないと思います Sent from my iPhone
5	Y.F.	面白い vs 得意 二者択一になった場合、どちらを選ぶべきか…
6		信じられない
7	にゃんばすー	就職も大切だとおもいます
8		比較的ハッピーな学生が分生に来てるんじゃないでしょうか
9		日本人の「どちらともいえない」の多さ……
10	石器人	素子重視の研究が中心になっている。素子からシステム全体まで渡る研究がまだ実現できていない。
11	ooo	ウェット畑でドライもやると、たたかれます。それで方向性など、わからなくなってしまうます。大きく間違っていたらと不安です。
12	Drosophia	基礎研究においてどのモデル生物を選ぶかもテーマ選びに大事だとおもいます。ハエ、線虫、マウスなど少数のモデル生物が今後も繁栄しますか？新しいモデルを模索していくべきでしょうか？
13		PIがテーマ面白くないと思ってたら、ダメダメだろ
14		満足してると答えたけど、問4を答えないと次の間に進めなかったので「その他」にしました。
15	minoru	テーマに疑問を持ったので、ラボをかえちゃった。相談するのは、下っば学生には勇気が要ります。
16	めがね	企業的になると面白くなくなる
17		wetのひとが自分の調べたいことに関して dry やっていると、そんなことをやるより実験しろっていうことになるものなんじゃないでしょうか
18	名無しの凡人	今の研究に満足が多いっていうのは、井の中の蛙的な現象のような気がします。周りを見れば更に面白いこともあるのでは？現状に満足してはいけないとも思います。
19		まあ闇実験やれば好きなことはそれなりにできるとおもいます
20	テーマに満足できない理由	先行研究が間違っていた。助教から卒論テーマをもらったが、教授が興味を持っていない。
21	Mon	研究のモチベーションをずっと保つにはどうしたら良いか…
22	おかね	予算が取りやすい研究をすべき？

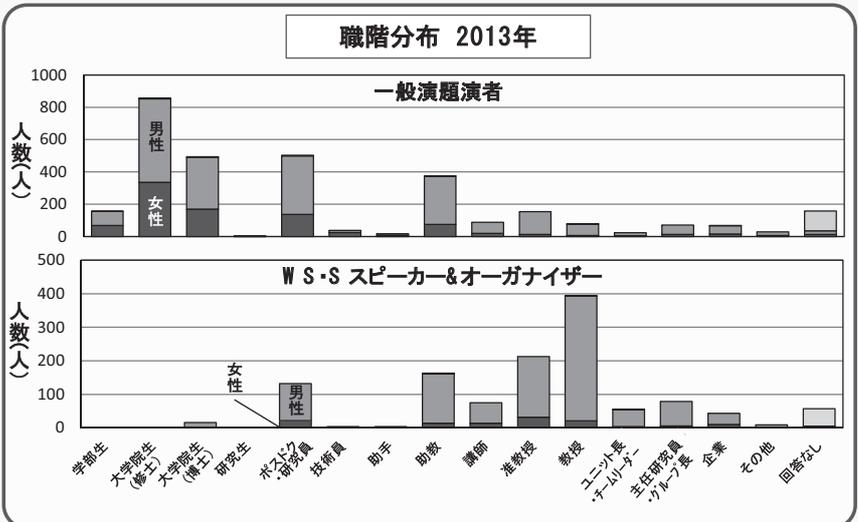
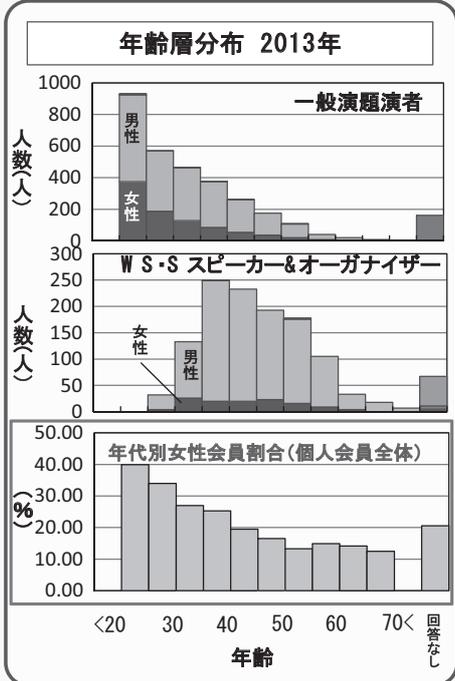
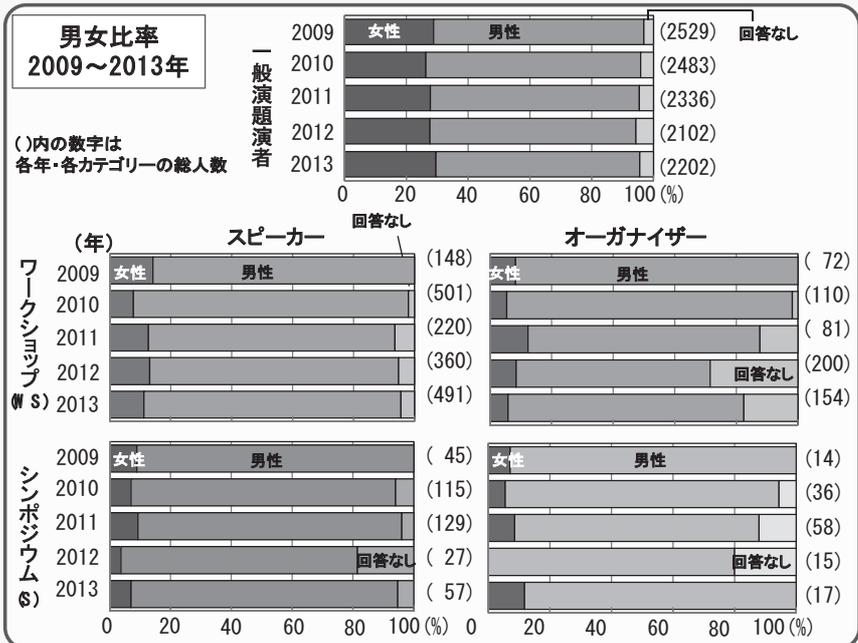
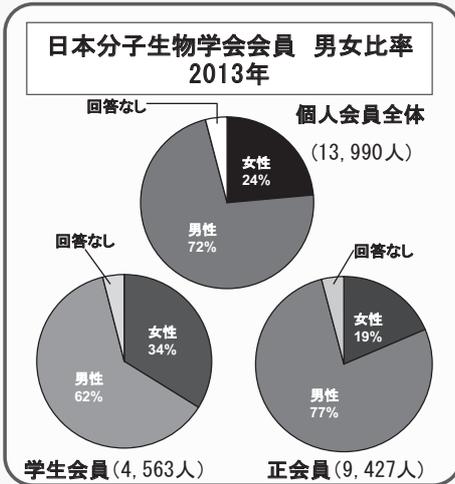
No	ハンドルネーム	コメント
23		満足しているテーマって、将来性と相関あるんでしょうか？
24		学生で面白いと思うのはすでにわかっていることが多い気がする。
25		お手伝いの仕事を任されている人は情報収集のための学会に参加させてもらえないよね
26	電子	バイオインフォマティクスはパソコンとの睨めっこで、いまいちなんの役に立つのか不安になります…結果が出てピンと来ないことがしばしば
27	A	自分が面白いと思う研究と人の役に立ちそうな研究に乖離がある場合は？
28	医学部医学科 1 回生	まず研究というものに触れようと思ってます
29		その内容は競争相手が多いからダメだと言われた。
30	太郎	面白いテーマやってたけど結果出なかったよテヘペロ (やばい)
31	Kawakatsui	学生の身分として、上の人に自分の考えを伝えるのは勇気がある。上の人とはどんどん言って欲しいものなのか。
32	にゃんぱすー	修士で学振を取るためのテーマをやるのはどうなんですか？
33		隠れ実験しなさい、というボスは多いですが、してるの見た怒るじゃないですか？そのトラップやめて欲しいです…
34	きなこ	ボスの趣味に過ぎないという割合が少ないのに驚きました。本当ラボに依りますね。iPad から送信
35	薩摩富士	相談しようにも、ボスが癪癪 (かんしゃく) を起こすせいで話になりません。
36	ブログ主	わしがそだてた
37		先進的な研究をしているところがいいのか、研究結果かでてるところがいいのか。
38	おとこ	コミュニケーションは努力だ Sent from my iPhone
39	コンタクトレンズ	面白ければいいと思う。役に立つ立たないは後から誰かが決めるかと。じゃなきゃ大王イカの特集で日本は沸かなかったと思う。
40	将来性	次行くラボでは学進とれるテーマにしてくださいって言うつもりです。金がなきゃ博士まで行けないもん
41	いつも不安	面白いテーマは世界中にライバルも多い。競争になるとつらい。面白いだけじゃなくて、オリジナリティのある意表を突くような研究をしたい。
42		相手に面白いと思わせる伝え方をすることも大切
43		学振は計画も見られるから、博士3年で実現可能なテーマ (計画) で書くべし
44	おとこ	面白くもないし意味もない研究してる暇は人類にない
45		テーマの将来性がなくても、自分の将来があればいいのでは？
46	わんこ	自分で自身や周囲のモチベーションをあげられる人は、面白そうな研究をしてる
47	ktnyt	人類の役に立つ利他的なテーマと、自己満足のための利己的なテーマと。最終的にどちらが幸せになれるのでしょうか。
48	ぴよ	新しい技術や手法を使えば最先端だって豪語して、問題提起も目的意識もない研究テーマはしんどかった。
49		お下がりのテーマより、自分で de novo でやったほうが愛着が湧きますね
50	Y.F.	秘められない。
51		もう少しコメントに言及してください。質問疑問に答えなければければこのセッションの意味がないのではないですか。
52	おとこ	幸せは人による Sent from my iPhone
53	ボンジーン	教員なし、学生がPIのラボがあったら面白い研究が現れるのではと思ってますがどうでしょう？ っと、いう僕は凡人ですが苦笑
54	non	やりたいことの多さに比べて研究人生が短いので、さっさとやりたいことをやるべきかと悩む
55		将来性のあるテーマな上に、オリジナリティも必要となると、なかなか難しい。
56		ボスに言われたことをやらされる研究室は、前半で堀田先生の仰っていたとおり、「いいラボ」への移転を考えるべきなのでは…？
57	企人	ボスになったら、という話が多いですが、どれだけの方々が独立して研究テーマを選べる立場になれるのか気になります。
58	石器人	今日のお弁当を食べたら、1時間後に、どれだけ頭が働きがよくなるかが、個人個人について予測できるようになったらすごい。
59	Y.F.	選択肢に挙がる時点ですでに二番煎じなのでは…？
60	将来性	研究を続けるための金とれるテーマと、本当に続けたいと思える興味のあるテーマ、どちらにすべきですか!?
61	j	PIが名誉のために三大紙ばかり狙うため、論文がなかなか通らない
62	せるげい	お弁当おいしかった ^^
63		「ラボを移りたい。」と大事なメンバーから言われて、すっと受け入れる度量があるPIはどれだけいるか？

シンポジウムでの発表者・オーガナイザーの女性比率は、
学会員全体における女性比率と比べて低いのではないかと

日本分子生物学会男女共同参画委員会(現:キャリアパス委員会)では、上記の疑問を持ち、2009年度から継続して年会発表者の属する性(属性)について調査している。

目的: 大学や研究機関での男女共同参画を推進するためには、学術研究発表の場である学会において、優れた研究は性差に関係なくスピーカーやオーガナイザー等、目に見える形で発表の機会を与えられたり評価される仕組みを作ることが必要である。そこで年会における発表者の実態調査を毎年行い、学会員の属性ならびに発表カテゴリごとの発表者属性について、基礎データを収集する。

方法: 年会演題登録時に各演題登録者から回答を得た(回答は任意)。また、オーガナイザーについては母数が少ないため、学会事務局からのメールによる属性調査(回答は任意:ワークショップ(WS)オーガナイザー対象)およびWEB検索する方法(シンポジウム(S)オーガナイザー対象)を併用した。



属性調査 まとめ

学会員の男女比: 2009~2013年の間ほぼ一定で、女性の占める比率は会員全体で1/4、学生会員で約1/3、正会員で1/5であった(過去データは非表示)。

一般演題発表者の男女比: 学会員の男女比にほぼ等しく、過去5年間で大きな変化はみられなかった。

WS・Sのスピーカー&オーガナイザーの女性比率: 正会員の女性比率よりも低く、この傾向に過去5年間で大きな変化はみられなかった。女性会員割合が年齢層が上がるに従って低くなっていることが、WS・Sのスピーカー&オーガナイザーの女性比率が少ない原因の1つと考えられた。しかし、例えば会員の40~45歳の女性比率は約20%であるにもかかわらず、WS・Sのスピーカー&オーガナイザーに占める女性割合は8.6%であった。

職階分布: WS・Sのスピーカー&オーガナイザーは、一般演題発表者に比べ高い階層にある。これら階層での女性比率は低く、また、キャリア・アップを必要とするポスドク、研究員、助教などでも明らかに低かった。

今後の対策: 継続的な調査を続けて情報発信・啓蒙活動に努めるとともに、スピーカー&オーガナイザーの増加に向けた具体的な取り組みが必要である。

キャリアパス対談 第3回：井関祥子×岩崎 渉

委員：井関祥子（医科歯科大・医歯）、
岩崎 渉（東大・大海研）

日時：2013年12月5日（木） 9：00～11：15

場所：神戸国際会議場

【井関】日本分子生物学会における男女共同参画は、2001年に年会保育室の設置を目指すところから活動が始まりましたが、ちょうど干支が一巡したタイミングで大隅典子先生が理事長就任の際に述べられたように、男女という枠組みではなく、若い方のキャリアを考えるためにキャリアパス委員会へと改組されることになりました。

本学会も加盟している男女共同参画学協会連絡会が、会員の意識調査を目的とした大規模なアンケートを4～5年おきに実施しています。そこで、バイオ系で最大規模の分子生物学会では、「バイオ系専門職における男女共同参画実態の大規模調査の分析」を行い、その結果から浮き彫りになった、ポストドク等のキャリアパスや意識改革など、男女とも共通の問題として取り組むべき必要性を私も感じているところです。

そこで今回のキャリアパス対談では、委員のなかで最も若い岩崎先生に若手の考えを聞かせていただき、今後の活動に活かせればと思います。今日はよろしく願います。

【岩崎】井関先生、こちらこそお願いします。

2012年末に実施された第3回大規模アンケートのバイオ系に関する調査分析は、本委員会ワーキンググループの先生方とこれから進めることとなりますね。

若手と一言と言っても様々なわけですが、大きく時代背景から言うと、私も含めてバブル期の上向きの世相を知らない世代ということは一つの切り口かなと思っています。そしてまた、これから従属人口指数（※働き手で



ある生産年齢人口100人あたり年少者と高齢者を何人支えるかを示す指数）が100に近づいていく社会で生きていくことを意識せざるを得ない世代、でもあります。男女共同参画、そして若手のキャリアパスについても様々な論点がありますが、考えていくと、結局のところはそういう“縮みゆく”時代の分子生物学の姿をどうするか？ということにおおよそ帰着するのかな、と思っています。いかがでしょうか？

【井関】うーん、真正面から切り込んできましたね（笑）。

社会全体の流れとしては、産休や育休などの取得が推進されたり、フレックスマな勤務体系が認められたり、職場での保育園の設置などハードとソフトの両方の面で働く女性の応援ムードは高まっていると思います。もちろん、産休を除いてですが男性も対象ですね。しかし、私たちの身近なところでは、女性研究者支援に関する制度はあっても、それが男女共同参画の飛躍的な意識改革に結びついているとは言えないでしょうね。

さて、欧米での取り組みを追随してきた我が国の男女共同参画で、バイオ系専門職の若手が指標とすべきは何かと思いますか？

【岩崎】ロールモデルという言葉も欧米から輸入されたもののひとつかもしれませんが、この言葉はちょっと誤解を招く場合があるかもしれませんね。世の中も変わる中で、女性に限らず若手研究者全体として、自分の歩みたい道を自分で考えなければいけない、ということは割と良く実感されていると思います。その中で、もしロールモデルに自分とは違うと感じるところがあれば逆に負の効果が現れることもありますし、そもそも研究者はある面でロールモデルが無いところに活路を見いだす職業でもありますよね。その意味では、ロールモデル集とい





うよりも例えば“こんな生き方もあります”集ぐらいの
ほうがメッセージが伝わる面もあるのかなと。

【井関】 おっしゃるとおりだと思います。私が学生の頃は
ロールモデルなんて言葉はありませんでしたけど（笑）、
男女共同参画に関わるようになってからは耳にする機会
が増えました。仮に誰かが私をロールモデルとしてくれ
たときに、それ自体はすごく嬉しいことですが、もとも
と思考やバックグラウンドも全く違うんですから、果た
して本当にお手本になるのかわかりませんよね。

そして、家族で食事ができる時間に帰宅するように仕
事を上手に配分できる方など、ワークライフバランスの
とれた方も上手にクローズアップしないと、窮屈に感じ
てしまうかもしれません。自宅より研究室のほうが落ち
着く私のようなケースもあったり、多様なロールモデル
があることに気付いてもらうのが大事ですね。

【岩崎】 私個人の実感としては、研究には携わりたいけ
ど“マッチョな”働き方はちょっと違う、自分らしくやっ
ていきたいと感じている学生も結構多いのかなと思って
います。自分らしくと言うと戦略的なコピーライティン
グみたいですし（笑）、その是非は議論の対象だと思
いますが、先ほどの縮みゆく日本のことを考えても、そ
ういうダイバーシティも受け入れられる環境はやはり必要
かもしれません。これはまさに男女とも共通に考えるべ
きテーマですし、今開催されている第36回年会でも取
り上げられている研究倫理の問題とも、裏では繋がって
くるところでもありますね。

【井関】 なるほど、ダイバーシティですね。

一方で、どういう人を育てていくかも重要になります
ね。多様な人材が欲しいのにマッチョな人材が育ってい
ないとなると、ダイバーシティが活かされなかったとい
うことになってしまいます。特にリーダーを育成する
という観点では、より意識的にロールモデルを選び、分析

したうえで学ぶことが求められる、ロールモデルとは本
来こういった定義だそうです。

もっと現実的に言えば、大学院の重点化で博士課程の
学生が増えました。すなわち博士の学位を持つ人の数が
増えているわけですが、例えば教授のポジションがそれ
に応じて増えているわけではありません。一般的に研究
の世界の中でのピラミッドの頂点と考えられる教授にな
ることがすべてではないと私自身は思っていますが、こ
こを目指さない若手はどうなりますか、という話です。
第36回年会で開催したキャリアパス委員会主催のラン
チョンセミナーでも取り上げましたが、ベンチャー企業
に勤めたり、製薬会社に就職したり、アカデミア以外の
仕事へ就くことに対して偏った考えを持った方もいると
思うんですが、最近はだいぶ変わってきましたよね？
一方で、フィンランドでは、某電気通信機器メーカーな
どの大手に就職するほうが稼げるからバイオ系には男性
研究者が残りにくい、という話を聞いたことがあります。

【岩崎】 そうですね、キャリアパスに関わるリスクが叫
ばれた時期を経たこともあると思いますが、それぞれの
選択だ、という意識に変わってきたと思います。

【井関】 リスクを回避する傾向が強くなっているのかな。
それでも、踏ん張って、踏ん張って、様々な経験を積む
ことの大切さも若い方には忘れて欲しくないですね。頑
張ったことはその後の人生に絶対に生きてきます。

それから、日本学術振興会の特別研究員-RPD (Restart
Postdoctoral Fellowship) 制度に男性も申請できるこ
とはご存知でしたか？ この制度は、出産や育児に際して
研究から離れざるを得ないなど、その後の研究現場への
復帰を支援するもので、分子生物学会が積極的に取り組
んできた活動のひとつです。結婚している女性研究者の
配偶者は、3人に2人が研究者ということもあるので、
夫婦で相談してどちらかが挑戦する方法もとれます。

このように可能な限り取り組んできたのだとは思いま
すが、いま男女共同参画が混とんとしてきたもたしか
だと思います。ランチョンセミナーで実施したアンケ
ートからもわかるように、女性研究者支援についても視
点も変えていく時期なのかもしれません。

【岩崎】 はい、今回のアンケートには注目すべきコメン
トが多く寄せられた一方で、論点はすでに出尽くしてい
るのかな、という印象も改めて感じました。例えばいわ
ゆるポジティブアクションについても、その必要性の一
方で、男性研究者のみならず女性研究者の側にも“特別
扱い”されることに対して否定的な考えがあることも自
然です。価値観はそれぞれに正しいので、次のステップ



に進む上では、少し根本的なところ、例えば先ほどもあったこれからの分子生物学の姿という観点から考えていくことも必要かなと感じます。

【井関】 積極性が養われていない、それに慣れていない女性が少なくないのはリアルなところだと思います。ただ、ある集団があるときに、一定の割合で女性がいるとバランスがいい面もあったりするんです。

現代の若手に目を向けたとき、彼らのPIは男女共同参画がようやく浸透してきた世代であることに気がきます。しかし、世間では専業主婦願望が高まるなど、制度の拡充とは逆行しているような側面もある。向き不向きもありますよね。だからダイバーシティだと？

【岩崎】 そうですね。実のところ、人事において「男女共同参画に配慮しています」というフレーズが形骸化しがちな構造的な原因は、公募の単位が“一人”であることにありますよね。また、例えば私の専門はバイオインフォマティクスですが、論文を書く研究者だけではなく、データベースの維持やサービスに向いている研究者も重要であったりします。どうすれば良いか私も具体的なアイデアがあるわけでは無いのですが、ダイバーシティをどう構造的に組み入れていくかということは、男女共同参画を推進するうえでも、若手のキャリアパス全体を考えるうえでも、共通してくるポイントかなと思っています。

【井関】 私自身は、「独立したい、PIになりたい」という気持ちはあまり強くなく、自分と年齢が近くて同じ研究をしているPIを見つければ、独立せずにいまの研究が長く続けられるって思ったんです。研究室の運営などをせずとも好きな研究が続けられると。ずるいですけど（笑）。

岩崎先生がお生まれになった頃、「大草原の小さな家」という西部開拓時代を描いたアメリカドラマが日本で放送されました。大好きで再放送も繰り返し観ていたのでよく覚えています。このドラマの中では主人公たちの職と住が近接で、男女共に役割があり、文句のつけようもないほどの絶妙なバランスで展開したドラマでした。しかしそんな主人公たちでさえ、男女どちらか一方が外へ働きに出ると、そのバランスが簡単に崩れ始めてしまいました。研究室のメンバーとは家族のような付き合いをする場合も多いと思いますので、バランスの重要性は言うまでもありませんね。そして、生活におけるいろいろな単位としての社会というグループが大きくなればなるほど、その比重は高くなります。

それと、私はすべての女性が社会に出て働かなきゃとは思いませんし、人生のある時点で家庭に入ることを否定するつもりもまったくありません。ただ、キャリアを続けていきたい、仕事を続けていきたいという女性がいたら助けて、そういうスタンスで委員会にも参加しています。

【岩崎】 今期から新しく始まったキャリアパス委員会の狙いも「より広い視野から問題を捉える」ということですから、まさしく、より広い視野からサポートできると良いですね。

【井関】 研究と教育をしている以上は、ある部分はこうだよと示さなきゃいけないけれど、あとは若手自身で考えてもらうのがいい。まさしく自立した研究者を育てるにはそれが一番ですよ。PIに良い意味での「おもてなし」の気持ちがなければ簡単に見透かされてしまいますから（笑）。岩崎先生、今日はありがとうございました。

「女子中高生夏の学校 2014」実行委員募集のお知らせ

キャリアパス委員長 塩見美喜子

「女子中高生夏の学校～科学・技術者のたまごたちへ～」(以下、「夏学」)は、女子中高生が科学技術の世界の楽しさを「体験」し、そこで活躍する女性たちと「交流」し、科学技術に関心のある仲間や先輩と「知り合う」機会として、2005年度より開催されています。

これから進路について考える中高生に、分子生物学への興味を持ってもらうことを重要と考え、本学会では第1回より毎回協力を続けてきました。

例年に引き続き、今年も「夏学」に分子生物学会のスタッフとしてご参加、ご協力くださる方を募集したいと思います。学生さんのご参加も大歓迎です。

どうぞよろしく願いいたします。

女子中高生夏の学校 2014 開催概要

- ・主 催：独立行政法人 国立女性教育会館
- ・日 程：2014年8月7日(木)～9日(土) (2泊3日)
- ・会 場：独立行政法人 国立女性教育会館 (埼玉県比企郡嵐山)

※ご参考

「女子中高生夏の学校 2013」参加者募集要項：<http://www.nwec.jp/jp/program/invite/2013/page02i.html>

「女子中高生夏の学校 2013」実施報告：<http://www.nwec.jp/jp/program/invite/2013/page02s.html>

〈募集内容〉夏学2日目(8月8日)に行われる、「実験・実習」(参加生徒10名程度を対象)または「ポスターセッション(ミニ実験付)・キャリア相談ブース」をご担当くださる方

〈応募方法〉ご協力くださる方、ご興味のある方は、学会事務局宛 (info@mbsj.jp) にメールにて、お名前、ご所属先、会員種別(正会員または学生会員)をご連絡ください。

〈募集締切〉2014年3月31日(月)締切

また、ご不明な点がございましたら、学会事務局 (info@mbsj.jp) までご連絡ください。

◆特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第18期第3回理事会記録

日 時：2013年12月2日(月) 15:00～20:30

場 所：神戸国際会議場 4階「403」

出席者：大隅典子(18期理事長)、小原雄治(副理事長)、中山敬一(副理事長)、阿形清和、荒木弘之(広報幹事兼)、五十嵐和彦、一條秀憲、上田泰己、上村 匡(編集幹事兼)、後藤由季子(会計幹事兼)、近藤 滋(第36回年会長兼)、相賀裕美子、塩見美喜子(集会幹事兼)、篠原彰、高橋淑子、月田早智子、町田泰則、三浦正幸、山本正幸、渡邊嘉典、石野史敏(庶務幹事)、本間美和子(庶務幹事)、金井正美(広報幹事)、以上23名

欠席者：石川冬木、大隅良典、岡田清孝、佐々木裕之、田中啓二、長田重一、西田栄介、花岡文雄、山本雅之、郷 通子(監事)、永田恭介(監事)、武田洋幸(集会幹事)、小安重夫(第37回年会長)、以上13名

事務局：福田 博(記録)、並木孝憲、丸田夏子、山口恵子

本理事会成立について：

本間美和子庶務幹事より、理事20名、幹事3名が出席し、委任状12名(理事9、監事2、幹事1)を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

大隅典子理事長より、議事録署名人として、五十嵐和彦理事と塩見美喜子理事が指名され、承認された。

島本功本学会理事が本年9月28日に逝去なされた。議事に先立ち、出席者一同により黙祷を捧げた。

議 事：

1. 報告事項

1) 執行部報告(理事長、庶務幹事、広報幹事)

・「日本版NIH」構想について

大隅理事長より、5月に公開された「日本版NIHの骨子」に対し、6月10日付で生命科学系6学会との連名で『健康医療分野における研究助成のあり方について(緊急声明)―「日本版NIH」構想と裾野の広い基礎研究の必要性―』、6月11日付で生物科学学会連合加盟団体の一員として『(緊急声明)「日本版NIH」構想における資源配分と人材育成プロセスへの懸念』の緊急声明発表を行ったことが報告された。

・会員現況

本間庶務幹事より、2013年11月25日現在の

会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員 1名

正会員 9,424名(海外在住163含む)

学生会員 4,587名(海外在住15含む)

賛助会員 29社

合 計 14,041名(前年12月対比、-1,240)

本年6月に会費3年以上滞納者の除籍処理(2258名)を行っている。自己申告による通常の退会者も相当数あり、それに対し昨年12月から本年11月の1年間に1897名(正会員517、学生会員1379、賛助1)の新入会があったことが報告された。

・生物科学学会連合について

本間庶務幹事より、生科連の活動状況につき報告がなされた。本年より生科連に下記2つの検討委員会が立ち上がることになり、本学会を代表して以下の理事に各委員会に入らせていただくことになった。

○生科連 教科書問題検討委員会 ←篠原彰理事(生命科学教育担当)

○生科連 ポスドク問題検討ワーキンググループ ←塩見美喜子理事(キャリアパス委員会委員長)

・金井正美広報幹事より広報に関する報告が行われた。

①8月1日より学会ホームページをリニューアルした。改訂の際のコンセプトの説明に続き、2013年1月以降の月間アクセス統計、リニューアル後の総ヒット件数(ページ別TOP5、国別TOP5)につき、報告がなされた。

②学会案内パンフレットを改訂した。

③SNSツールを活用するため、本年2月より学会Facebookの運用を開始した。11月22日時点で計193件の記事を投稿し、「いいね!」を「435」獲得している。

ホームページをリニューアルした8月1日から11月22日までに受け付けた外部からの掲載依頼は、Facebookの運用効果もあり、人材公募記事数は昨年同時期と比べて2倍以上となった。

2) 近藤 滋第36回年会長より準備状況の報告がなされた。

(i) 配付資料に基づき、事前参加登録人数、発表演題数、展示・広告・バイオテクノロジーセミナー実施企業数に関する報告が行われた。

(ii) ここ数年、年会参加者数が減少傾向にある。会員の年齢構成は20代・30代が減っており、このままでは20代と50代の数が逆転するのは2020年頃ではないかとのスライド説明がなされ、そこで若い世代を取り込みたいとの考えから様々な新しい企画を試みるに至った。

今年の年会は、準備段階から組織委員会の考えをSNS等を使い積極的に発信し、会員からのフィードバックを取り込むことで各種の特別企画を作り上げていった。これらの実験的・挑戦的な企画は、全体として未来における巨大会のあるべき姿を構成しているとの36回年会的コンセプトについて説明がなされた。

ポイントとして、学会が(1)研究者社会の問題解決に寄与できるか、(2)サイエンスアウトリーチの核になれるか、という2つの課題へチャレンジした年会となった。

○生命科学研究を考えるガチ議論

○特別シンポジウム「薬を創るということ」

○学会とJAZZの融合

○アート企画「サイエンスとアートの接点」

○SFトークショー「2050年シンポジウム」

○公開プレゼンテーション「生命世界を問う」

○海外ポスドク旅費補助

(iii) 近藤年会長からの説明を受けた後、活発な意見交換が行われた。出席理事からの提出意見(一部)は次のとおりであった。

・学会と年会的関係であるが、年会的企画・運営をすべて年会長に一任するのではなく、もう少し学会がリードしたほうがよいのではないか。

・年会的企画の継続性、学会企画の年会的プログラムへの組み入れ(調整)をスムーズに進めるためにも、理事長や執行部が必ず次年度の年会的組織委員会に参画するようにしたらどうか。

・年会的企画・運営については、すべて年会長の裁量で(理事会からの制約なしに)自由に行えることが本学会のよいところでもある。

・すでに昨年12月の理事会で承認されている年会的(2014年の第37回年会的)の運営について、今の時点で年会的企画の継続性の要望を出すことには無理がある。一年前に、従来のルールである、自由に企画・運営してほしいとの条件で年会長を引きうけてもらっているはずである(実際にこの時点で、37回年会的の全体的日程はかなり固まっている)。

(iv) 「海外ポスドク招聘企画(旅費補助)」については次年度も継続したほうがよいとの意見を受

け、討議の結果、今後の年会的で基本的な方針としては継続していくことが了承された。実施規模(採択人数)については、予算を考慮しながらの判断とし、さらに、応募条件・採択基準等については、第37回年会的組織委員会で検討してもらおうこととなった。

さらに、同旅費補助を理事会で決定するのであれば、学会本部側で予算措置を講ずるべきではないかとの意見が提出された。この財源を捻出するために、節約(縮小)できる他の事業はないか、また、会計報告においても年会的会計の収支明細ではなく、学会本体会計の事業支出として記載されるべきではないかとの意見が出された。本部会計と年会的会計のいずれで負担していくか(注:最終的には法人全体として決算はすべて合算されるが)、今後の予算執行の状況をみながら検討していくこととなった。

3) 塩見美喜子集會幹事(小安重夫第37回年会长代理)より配付資料に基づき、第37回年会的開催企画案についての報告がなされた。

○会期:2014年11月25日(火)~27日(木)の3日間

○会場:パシフィコ横浜

○年会的組織:

【組織委員会】

年会长:小安重夫(理研)

組織委員長:嶋田一夫(東大)

組織委員:荒木弘之(遺伝研)

石野史敏(東医科大)

江口有(協和発酵キリン)

IT委員 岩崎 渉(東大)

【プログラム委員会】

委員長:塩見美喜子(東大)

副委員長:渡邊嘉典(東大)

プログラム委員:小林武彦(遺伝研)

斎藤通紀(京大)

白髭克彦(東大)

高橋淑子(京大)

内匠透(理研)

竹田秀(東医歯大)

豊島文子(京大)

吉田稔(理研)

吉森保(阪大)

渡辺雄一郎(東大)

プログラム庶務幹事:黒柳秀人(東医歯大)

《年会的開催コンセプト》

「サイエンスに没頭できる年会的」を目指して、学術プログラムを最重要視し、ライフサイエンスのすべてをカバーし全体を俯瞰できるような、分

子生物学会の原点に立ち返るような年会としたい旨、塩見集会幹事（37 回年会プログラム委員長）より詳細説明がなされた。

- ・ポスター討論を最重視し、第 32 回年会同様のディスカッサー制を取り入れる。ポスターセッションの時間には他のプログラムを何も入れないようにしたい。
- ・パシフィコ横浜の会場費の値上げ（2011 年横浜開催と比べ、約 20% の増額）と、参加者の便宜をあわせて考慮した結果、開催会期を 3 日間とし、各日とも午前中はシンポジウム、午後は一般口演をメインとした公募のワークショップを開催し、夕方には午後の一般口演発表を受けるかたちでポスター討論を行う形式としたい。
- ・シンポジウム（18 テーマ予定）はプログラム委員の名前を冠した企画を 12 枠、オーガナイザー指名による企画 6 枠を予定。企画者には専門外の参加者にも分かるような分野横断的な企画を依頼、また、毎年同じメンバーによるシンポジウムにならないよう、積極的に違うグループからの演者登用をお願いする予定である。
- ・ワークショップ（約 50 テーマ予定）は、会員による公募企画とし、公募で網羅できなかった分野があればプログラム委員会で追加企画を行う予定である。一般演題からの採択を主とし、指定演者は 3 名までとする。指定演者にも必ずポスター発表を出してもらうようにする予定である。
- ・演題登録期間：会期が例年より約 2 週間早いこと、またワークショップへの一般演題引き上げと、新仕様のオンライン要旨へのデータ反映等にかかる日程を考慮し、演題登録期間は過去の合同大会開催時に準じた 2014 年 7 月 1 日(火)～7 月 31 日(木)とする。
- ・要旨閲覧 SNS システム：35 回年会より導入された SNS 機能搭載の要旨閲覧システムは、同様の仕様を踏襲する。システム開発・運営業務委託先は、2013 年 8 月 23 日(金)に 4 社が参加して行われたコンペの結果、株式会社アトラスに決定した。来年はオンライン要旨と合わせてアプリも開発することとし、会場内で Wi-Fi を使用できる場所はパブリックスペースと展示会場のみに限定する予定である（講演会場には Wi-Fi を設置しない予定（講演聴講に集中してもらう））。
- ・リクルート企画など企業と学生、研究者の間を仲介するような企画や、若い人たちをどのようにひきたてていくかという点について効果的な

プログラムを考えていきたい。

- ・36 回年会の海外ポスドク招聘企画をどのような形式で継続するかは、報告事項 2) (iv) の議論の内容を考慮し、今後、条件や対象（Travel Grant にする等）も含めて、組織委員会において検討していきたい。
- 4) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。
- 幅広い分野の研究者から投稿してもらえるように改訂した投稿規定が浸透しつつあり、論文は昨年並みの投稿数となる予定である。
- 2011 年に一新した表紙デザインは高い評価を得ており、2014 年も日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙の制作を継続していく予定である（丸 3 年分の表紙 / cover art 一覧を資料配布）。また、第 36 回年会においてアート企画の一環としてカバーアート展示が行われており、この展示は表紙の制作過程も知ることができる内容となっているので、ぜひご覧いただきたい。
- 引き続き、『Genes to Cells』において初めて論文の撤回が行われたとの重要な報告がなされた。撤回した論文は 4 本。責任著者から編集長へ撤回したい旨の申し入れがなされ、編集長・出版社・責任著者の三者がそれぞれの論文のどこにどのような問題があるのかを確認し合意するという手続きを取った。既にジャーナルのホームページには詳細な報告を掲載しており、会員へは来週（本年会の翌週）、同報告を含めた 12 月号の目次メール配信を行う予定である。
- 就任期間等が長くなってきていることもあり、理事会において後任の編集長人事を検討してほしい旨の要望が提出された。編集長の交代時期にあわせて、編集幹事の後任についても検討いただきたい。
- 5) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について
- 一條秀憲賞推薦委員長より、2013 年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、月田早智子研究助成選考委員長より、2013 年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。
- 6) 塩見美喜子キャリアパス委員長より、配付資料に基づき、本委員会のミッション、委員会名簿、この 1 年の活動内容と開催会合、男女共同参画学協会連絡会への本委員会の参画状況についての説明がなされた。
- 本年会においては、キャリアパス委員会主催のランチオンセミナーを 2 つ開催するので、理事各

位においても積極的に参加いただきたい。

《キャリアパス委員会主催 ランチョンセミナー 2013》

セッション I「キャリアパスの多様性と可能性」
(講演 I、II + パネルディスカッション)

セッション II「21 世紀のアカデミア、君たちは何をを目指す？」

(講演 + ケータイをつかった聴衆参加型ディスカッション with キャリアパス委員)

引き続き、関連事項として、阿形清和理事(動物学会会長/学協会連絡会 第 11 期幹事学会として)より、男女共同参画学協会連絡会・第 3 回大規模アンケート結果概要につき報告が行われた。

7) 富澤基金・基金運営委員会報告

山本正幸基金運営委員長より、富澤基金による第 3 回(2013 年)日本分子生物学会 若手研究助成の結果につき、その概要が報告された。

(i) 第 3 回応募の受付期間:

2013 年 1 月 10 日~2 月 12 日

(ii) 応募総数:

123 名(男性 93 名、女性 30 名 ※性別は名前から推定による)

(iii) 選考:

- ・第 1 次審査:書類審査
- ・第 2 次審査:9 名を対象に 5 月 11 日にヒアリングを実施

(iv) 審査経過と第 3 回助成対象者:

審査経過詳細については、会報 105 号(2013 年 6 月号)に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第 3 回若手研究助成の助成対象者は以下の 4 氏である。

○小島志保子

(UT Southwestern Medical Center)

Poly(A)鎖長の変化による神経可塑性制御機構の解明

Poly(A)denylatome analysis of dendritic protein synthesis and synaptic plasticity

○竹ヶ原宜子

(University of Pennsylvania, School of Medicine * 2013 年 11 月より、大阪大学免疫学フロンティア研究センター)

破骨細胞融合メカニズムの解明

Elucidation of osteoclast fusion mechanisms

○坪内知美

(MRC Genome Damage and Stability Centre, University of Sussex)

胚性幹細胞のゲノム恒常性維持機構の解析

Understanding the Mechanism for the Maintenance of Genome Stability in

Embryonic Stem Cells

○松田憲之(東京都医学総合研究所)

パーキンソン病の発症メカニズムを、急性ミトコンドリア障害の観点から明らかにする

Elucidate the pathogenic mechanism of Parkinson's disease from the viewpoint of acute mitochondrial dysfunction

8) 第 2 回(2014 年)国際会議支援選考結果報告

三浦正幸国際会議支援選考委員(西田栄介選考委員長代理)より、第 2 回目となる国際会議支援については、6 件(うち 1 件は審査期間中に取り下げ)の応募があり、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の 2 会議(計 600 万円)が採択されたことが報告された。

《会議名称》

(和文) 2014 年 線虫発生生物学国際集会・第 6 回アジア-太平洋線虫集会 合同大会

(英文) 2014 C. elegans Development, Cell Biology and Gene Expression Meeting in association with The 6th Asia-Pacific C. elegans Meeting (略称: 2014 C. elegans Development Meeting)

・開催責任者:杉本亜砂子(東北大院・生命科学)

・会期:2014 年 7 月 15 日(火)~7 月 19 日(土)

・会場:奈良県新公会堂(奈良市)

・助成金額:300 万円

《会議名称》

(和文) ショウジョウバエ幼虫の神経行動遺伝学:分子、回路、計算原理、そしてロボティクス

(英文) Behavioral Neurogenetics of larval Drosophila: Molecules, Circuits, Computation & Robotics

・開催責任者:能瀬聡直(東大院・新領域創成科学)

・会期:2014 年 3 月 9 日(日)~12 日(水)

・会場:KKR 熱海(静岡県熱海市)

・助成金額:300 万円

本年度の審査結果報告とは別に、出席理事より来年度の予算(年会時の海外ポスドク招聘企画・旅費補助)が厳しい状況であるので(→詳細は審議事項 2. 監事からの意見書についての関連審議を参照)、次年度の国際会議支援事業の運用(選考と採択)に当たっては、本事業が開始された際の当初のポリシーを考慮・審査いただくことが重要ではないかとの意見が提出された。

また、採択された国際会議については、会議終了後に開催責任者にミーティングレポートを書いてもらい、Genes to Cells に掲載したらどうかとの提案が出され、審議の結果、了承された。第 3 回募集の案内(HP のお知らせ:応募締切は 2014 年

2月28日)については、至急、その旨の内容を留意事項としてHPに追加記載することとした。

9) 生命科学教育(高校などへの講師派遣の状況)について

篠原 彰担当理事より、生命科学教育に関して、以下の報告がなされた。

(i) 高等学校における生物学の教科書の大幅改訂において、分子生物学が1つの大きな柱に取り上げられたことを契機に、講師として登録を申し出てくれた会員(2013年12現在、200名弱)を高等学校などへの講師として派遣している。これまでの実績8件(派遣先、参加人数、講師氏名)につき、報告が行われた。

(ii) 年会における高校生発表について

昨年、第35回(2012年)福岡年会において初めて高校生発表枠を設け、高校生による口頭・ポスター発表を行った。今年、第36回年会においては、会期3日目の12月5日(木)午後4時からポートピアホテル南館1階のホワイエにて高校生発表(ポスター発表10題、うち5題が口頭発表、参加高等学校数は8校)を行うことが報告された。

引き続き、『年会での高校生発表』について討議がなされ、来年以降も本事業を学会企画として継続的に実施していくことが決定された。すでに開催準備(全体日程/会場調整)に着手されている小安第37回年会会長にはご協力依頼をすることとなった。第38回(2015年)年会以降は、学会開催企画として『高校生発表』を実施することを確実に申し送ることが確認された。なお、年会の開催会期によっては、高校生の期末試験日程等の兼ね合いもあり参加が難しい場合も予想されるが、臨機応変に対応することとした。

(iii) 学会のキャラクターデザインについて

本学会は、昨年より、パシフィコ横浜で8月に開催される『SSH生徒研究発表会』に学会ブースを出展し、高校生や引率の教員の方々への学会事業のPR活動を行っている。また、男女共同参画『女子中高生夏の学校』等への積極的な協力を行っているが、今後、生命科学教育を進めていく際に、現在のロゴマークだけでなく、中高生にとって親しみやすい興味がわくような学会キャラクターデザインを作ったらどうかとの提案が篠原担当理事より提出され、了承された。

現在の学会シンボルマーク(ロゴデザイン)は2007年に公募を行い、当時の執行部におい

て採択されたものである(応募111点、賞金10万円、採用されたデザインの著作権は学会に帰属)。

討議の結果、手順等については2007年ロゴマーク制定時と同様とし、会報2月号に公募案内を掲載、2014年8月上旬の中高生向けイベント(SSH生徒研究発表会、女子中高生夏の学校)における、学会グッズ配布に間に合わせることとなった。その選定作業等については、18期執行部と篠原担当理事が当たることとなった。

10) その他

- ・通常総会/議事進行と報告担当者の確認
- ・第3回富澤基金贈呈式について

大隅理事長より、昨年同様に“開かれた”総会を目指し、展示会場内の特設会場にて総会を開催することが報告された。総会終了後には第3回富澤基金贈呈式が行われる。理事会関係者においても多数参加してほしいとの要請がなされた。

引き続き、本間庶務幹事より、第36回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認が行われた。

2. 審議事項

1) 2013年度(平成25年度)収支決算承認の件

後藤由季子会計幹事より2013年度(平成25年度)会計の収支について説明がなされた。2013年度会計は、当初、昨年の福岡年会予算がかなり厳しい状況が予想されていたため、もともと赤字予算を組んでいたが、決算処理の結果、約891万円の黒字決算で終えることが出来た。黒字となったポイントは、『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算収入が、精算時の為替レート(円安効果)の関係もあり、大きく伸びたことがあげられる。会費収入については、納入率は若干上がったものの会員数そのものが減少傾向にあり、予算をやや下回った。収支の各科目全般についての説明がなされた後、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金会計」についても詳細な報告が行われた。

本決算においては消費税等約96万円を納めており、その他の税務処理については顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもとに、収益事業部分の法人確定申告を行った。

本決算は、10月28日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年11月8日に郷通子監事、永田恭介監事による会計監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている旨報告がな

された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第36回通常総会に諮られることとなった。

2) 2014年度(平成26年度)収支予算ならびに事業計画承認の件

後藤会計幹事より2014年度(平成26年度)の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

新年度については、①36回年会の海外ポスドク招聘・旅費補助、151名採択のうち100名を超える部分の510万円(@10万円×51名)については、「第36回年会・特別支援支出」として、直接本部会計が負担すること(本件については昨年の理事会で了承済)、②研究不正問題の対応として本年会において、理事会企画フォーラム6セッションが開催されるが、会場費、機材費、運営人件費、非会員招聘者の旅費等、すべての関係費用を積算し、「理事会企画フォーラム関係費」として500万円を計上したこと、③2014年4月からの消費税値上げに伴う諸経費の増加、以上を考慮し、2014年度会計においては異例ではあるが、約1830万円の赤字予算を編成することとなった旨説明がなされた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第36回通常総会に諮られることとなった。

3) 監事からの意見書(提言)について

会計監査終了後の11月8日付にて、郷通子、永田恭介両監事より、理事長あてに意見書(提言)が提出されたことが大隅理事長より報告された。同提言は、会計監査にあたり各種会計書類を精査したうえで、学会の将来を考えての両監事からの意見書となっており、その内容は次の3点であった。

(提言Ⅰ) 長老学会員の脱会に関係して(新しい会員種別の検討)：

学会員の増減、特に学生会員数の推移についてはその学術活動パターンに鑑みて、大きな問題とする必要はないと考えている。ただし、退職を期に退会をされる長老学会員については、その方々の学術活動を支える思慮、およびその方々の経済的なご負担の観点、また長老学会員による学会の社会的な立ち位置の確保の視点などから、新たなカテゴリーの学会員として、正会員の持つ権利のうち、学会運営には責任を持たず、学術的なメリットを保持できるような立場での会員資格の継続に繋がる方策を検討されたら、本学会にとって意義があるのではないかと。

(提言Ⅱ) 年会運営経費について：

法人化以前には、年会は年会長の経済力を背景に学会会計とは別会計で運営されてきた。法人化と前後して、年会開催経費は学会の全体運営の内処理となった。現在までのところ、健全に年会が企画され、計画され、開催されていると考えるが、年会運営経費が学会全体経費の2/3程度になっている現状では、今後、財政的な観点からも、より計画的な財務計画を立案することも必要ではないかと考える。年会運営経費についての一定の財務的な枠についても考慮される時期ではないかと考える。

(提言Ⅲ) 事務担当者の給与について：

これまでの日本の状況からは、給与の著しい引き上げについては十分な考慮が必要であった。しかし再び構造的に経済成長を目指す現在にあって、また少人数事務職員による巨大会運営に伴う個々人の負担増の観点からも、事務担当者の給与の基礎額および定期昇給額について、給与の将来計画も含めて、再考されるべきだと考える。

大隅理事長からの以上の詳細説明の後、審議に入った。

●提言Ⅰ 会員種別の新設に関して、活発な意見交換が行われた。

例えば、『功労会員(仮称)』または『シニア会員(仮称)』といった名称で、年度会費は学生会員と同額程度とし、議決権は有しないものの、年会には無料で参加でき、『Genes to Cells』オンライン版も閲覧可能といった新しい会員種別を作ったらどうかの意見が提出された。出席理事より他学会の同様の制度紹介もなされた。功労(シニア)会員となる要件(案)としては、65歳以上、会員歴20年以上、自己申請で申し出ていただく(あくまで会員本人の意思によるものがよいのではないかと)、等の意見が多数をしめた。会員種別の新設は、定款変更が必要であり、本法人(特定非営利活動法人)の所管である東京都への事前連絡(確認)の後、来年の総会に諮る必要がある。

討議の結果、本件については、執行部にて新会員種別およびその運用(案)を作成し、あらためて、理事会持ち回り審議に諮ることとなった。

なお、自由討論の過程で、海外ポスドク会員の検討といった意見も出たが、年会特別支援(海外ポスドク旅費補助)で対応できるのではないかとすることに集約された。さらに高校の教師、社会一般の方を対象とした会員カテゴリー『準

会員（仮称）』の必要性についても意見が出されたが、あまり会員種別が増えてしまうのも煩雑さを伴うので、まずは『功労（またはシニア）会員（仮称）』制度の準備を進めることとなった。（*後日、大隅理事長より事務局あてに、海外に留学する際の休会制度を検討するようにとの依頼がなされた。休会手続きに関しては規則の変更ではなく、事務局の運用で対応が可能であるので、事務局で運用案を作成し、執行部の確認を取ることもとなった）

●提言Ⅱ 年会運営経費が学会全体予算の運営経費の2/3となっている件について、種々意見交換がなされた。年会経費（定額補助金+年会関連の特別支出）の負担が経年的に過度な学会本体負担とならないよう、より計画的な（中長期的な）立案が必要ではないか、しかし本会の事業の中心はやはり年会にあるのでいたしかたない（主軸をどこに置くのか）等々、活発な議論がなされた。学会のあり方といった観点も含め、執行部でも方向性を検討し、理事会においては継続的に議論を進めることとなった。

●提言Ⅲ 事務局職員の給与については、規程の検討・改善など、執行部が対応することが了承された。

4) 第38回（2015年）年会長について

大隅理事長より、第38回年会については、年会長を京都大学ウイルス研究所 影山龍一郎会員に依頼したいことが諮られ、承認された。（開催地：神戸、会期：2015年12月1日(火)～4日(金)/会場については事務局にて3年前に確保済み）

5) 細則改正の件

大隅理事長より、現行の細則において理事会の成立要件がはっきりしていないこと、また近年、メール審議において重要な案件を審議するケースが増えており、持ち回りメール審議に関する細則の整備の必要性についても説明がなされた。

理事会細則第8条につき、以下のとおりの細則変更が諮られ、審議の結果、承認された。

.....
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 細則

第4章 理事会

第8条

【改正前】

理事会は、表決権を有する構成員の過半数の賛成により成立する。また、やむを得ない事由のため理事会に出席できない構成員は、委任状により表決することができる。

↓

【改正後】

理事会成立のための定足数、ならびに議決（メール審議を含む）について次のように定める。

- 1) 理事会は、理事の過半数の出席（委任状を含む）をもって成立する。
- 2) 審議事項の議決は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長（理事長）が決定するものとする。
- 3) 理事会の議決を要する事項について、日程的都合等により理事会を開催することが困難であると理事長が判断した場合は、「持ち回り理事会（メール審議）」にて審議を行うことができる。持ち回り理事会は、定められた期限までに理事の過半数の回答者数があることを成立の条件とする。
- 4) 持ち回り理事会の議決は、回答した理事の過半数により決するものとし、可否同数の場合は理事長が決定する。

..... 6) 論文不正問題の件

小原雄治研究倫理委員長より、論文問題に関して、その後の経緯・対応状況につき詳細報告が行われた。

- ・7月下旬の新聞報道を受け、論文不正問題に関する再度の要望書を東京大学へ提出（2013.8.7）
- ・アンケート集計結果をHPに掲載（2013.8.28）
- ・論文不正問題に関する回答書を東京大学より受理（2013.10.17）

10月16日に拡大研究倫理委員会（参加者：研究倫理委員、執行部、年会ワーキング委員）を開催し、理事会企画フォーラムの各セッション内容について、詳細な検討を行った。その後、メール会議を重ね、明日からの6セッションのフォーラムを開催するに至ったことが報告された。

《第36回年会 / 理事会企画フォーラム》

「研究公正性の確保のために今何をすべきか？」
会場：神戸ポートピアホテル地下1階トパーズ

12月3日 10:00～11:30

研究主宰者や共同研究者が研究公正性に果たすべき役割

12月3日 14:00～15:30

研究機関が研究公正性に果たすべき役割

12月4日 10:00～11:30

研究不正を防ぐジャーナルシステム

12月4日 14:00～15:30

研究不正を防ぐ研究費配分システム

12月5日 10:00～11:30

不正調査の実際と有効性

12月5日 14:00～15:30

まとめ、今後の課題と次のアクション

各セッションのめざすところ、プログラム内容について、活発な意見交換が行われ、進行につい

ては司会者（小原委員長、中山敬一副理事長、篠原理事）に一任することが確認された。今回、各セッションの概要は篠原理事の尽力により、翌日の朝までに年会 HP にアップされる予定であり、また、フォーラム専用の掲示板（フォーラム会場でリアルタイムで映写可）を立ち上げたことが小原委員長より報告された。

なお、事前に年会 HP 等でも公告しているが、後日、6セッションすべての全文記録を学会 HP で公開する予定である。全文を公開することに関して、本理事会において再確認が行われ、了承された。

フォーラム 6 セッションの議論を有意義なもの

とし、論文問題に関して、理事会としての次のステップにつなげていきたい旨、小原委員長より説明と協力要請がなされた。

上記、第 18 期第 3 回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2013 年 12 月 2 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 18 期第 3 回理事会
議 長 大 隅 典 子 ㊟
議事録署名人 五十嵐 和 彦 ㊟
議事録署名人 塩 見 美 喜 子 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成 26 年度（第 36 回）通常総会記録

日 時：平成 25 年 12 月 4 日(水) 17:00 ~ 17:40
場 所：神戸国際展示場 2 号館 1 階（展示会場 1）
特設会場

社 員 数（正会員 + 名誉会員）：9,425 名
出席者数：4,952 名（本人出席 75 名、表決委任者 4,877 名）

議事内容：

1. 定款第 25 条に基づき、大隅典子理事長より本総会議長として塩見春彦会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名は、小安重夫会員（第 37 回年会長兼）と大隅理事長が担当することが確認された。
2. 塩見議長より、定款第 26 条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席 4,952 名となり、本総会は成立する旨報告された。

3. 経過報告（事業報告）

1) 理事長報告

大隅理事長より、総会資料（1 頁：2013 年度事業報告）に基づき、事業活動全般と、さらに下記 3 点につき報告が行われた。

①学会運営の組織体制などについて

第 18 期理事会の役割分担、各種委員会体制につき説明がなされ、今期よりキャリアパス委員会（委員長：塩見美喜子理事）が発足し、活発に活動を行っていることが報告された。

- ・研究倫理委員会の委員長には前理事長である小原雄治副理事長が就任し、前期から継続している研究倫理問題の対応に当たってもらっている。
- ・篠原彰担当理事のもと、生命科学教育事業として、高校などへの講師派遣を行っている。

②第 38 回（2015 年）年会長について

12 月 2 日に開催された第 18 期第 3 回理事会に

おいて、第 38 回年会については、影山龍一郎会員（京都大学）に年会長をお願いすることが決定した。

③「日本版 NIH」構想について

5 月に公開された「日本版 NIH の骨子」に対し、6 月 10 日付で生命科学系 6 学会との連名で『健康医療分野における研究助成のあり方について（緊急声明）—「日本版 NIH」構想と裾野の広い基礎研究の必要性—』、6 月 11 日付で生物科学学会連合加盟団体の一員として『（緊急声明）「日本版 NIH」構想における資源配分と人材育成プロセスへの懸念』の緊急声明発表を行った。これらの行動はある程度効果的であったと思われるが、なお予断を許さない状況である。

2) 庶務報告

本間美和子庶務幹事より以下の報告が行われた。

- ・会員現況：〔2013 年 11 月 25 日現在〕名誉会員 1 名、正会員 9,424 名、学生会員 4,587 名、賛助会員 29 団体、総計 14,041 名（前年 12 月対比、- 1,240）
- ・広報活動：2 月に facebook の運用を開始した。8 月 1 日より学会ホームページをリニューアルし、11 月に学会案内パンフレットの改訂を行った。ホームページについては、アクセスの多い月は 4 万件 / 月を超えることが報告された。
- ・従来の細則では理事会の成立要件がはっきりしていないとの意見を受け、第 18 期第 3 回理事会（12 月 2 日開催）において、以下のとおり、細則第 8 条を改正したことが報告された。

○特定非営利活動法人 日本分子生物学会 細則
第 4 章 理事会

第8条

【改正前】

理事会は、表決権を有する構成員の過半数の賛成により成立する。また、やむを得ない事由のため理事会に出席できない構成員は、委任状により表決することができる。

【改正後】

理事会成立のための定足数、ならびに議決（メール審議を含む）について次のように定める。

- 1) 理事会は、理事の過半数の出席（委任状を含む）をもって成立する。
- 2) 審議事項の議決は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長（理事長）が決定するものとする。
- 3) 理事会の議決を要する事項について、日程的都合等により理事会を開催することが困難であると理事長が判断した場合は、「持ち回り理事会（メール審議）」にて審議を行うことができる。持ち回り理事会は、定められた期限までに理事の過半数の回答者数があることを成立の条件とする。
- 4) 持ち回り理事会の議決は、回答した理事の過半数により決するものとし、可否同数の場合は理事長が決定する。

3) 編集『Genes to Cells』報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』の刊行状況につき以下の報告がなされた。

- ・新しい投稿規定が浸透しつつあり、投稿数も安定してきている。従来の分子生物学中心のものはもちろん、理論や方法論、マクロなども含めた生命科学の全分野にわたって投稿を受け付けている。またアソシエイトエディターからの提案を受けて、見開きのものなどショートフォーマットの投稿を受け付けることも検討している。会員各位においては引き続き、積極的な投稿・提案をお願いしたい。
- ・2011年より一新した表紙デザインは高い評価を得ており、他誌からも問い合わせを受けるようになった。引き続き日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙デザインの制作を継続していきたい（スライド：2013年の表紙 / cover art 一覽）。また、第36回年会においてアート企画の一環としてカバーアート展示が行われており、この展示は表紙の制作過程も知ることができる内容となっているので、ぜひご覧いただきたい。
- ・『Genes to Cells』において初めて論文の撤回が行われた。撤回した論文は4本。責任著者から編集長へ撤回したい旨の申し入れがなされ、編集長・

出版社・責任著者の三者がそれぞれの論文のどこにどのような問題があるのかを確認し合意するという手続きを取った。既にジャーナルのホームページには詳細な報告を掲載しており、会員へは本総会の翌週に、同報告を含めた12月号の目次メール配信を行う予定である。

4) 研究倫理委員会報告

小原雄治研究倫理委員長より、研究倫理問題の動きについて以下の報告がなされた。

- ・本年3月に臨時理事会を開催し、その内容を受けて、論文不正防止のため積極的な対策をとることを確認し、会員各位への経過報告と今後の理事会方針をまとめた「研究倫理に関する理事長報告および理事会声明」を発表した（H25.6.12）。
- ・第36回年会企画（研究倫理・論文問題）に関するアンケートを実施し（H25.6）、その集計結果報告をホームページに公開した（H25.8.28）。
- ・加藤元教授の論文問題に関する本年7月25日付の新聞報道を受けて、事実関係の調査と結果公表を重ねて求める「論文不正問題に関する要望書」を東京大学に提出した（H25.8.7）。その後、東京大学より受理した「論文不正問題に関する回答書（H25.10.17付）」をホームページに公開した。同大学としては先述の報道が行われたことやその内容は本意ではないとしている。
- ・本年会会期中に6つのテーマによるセッションからなる理事会企画フォーラム「研究公正性の確保のために今何をすべきか？」を開催し、活発な議論を行っている。東京大学からの調査結果発表が行われたことを想定し企画していたセッションもあったが、残念ながらまだ発表がないので、そちらは発表があり次第、引き続き、学会対応を検討していきたい。

4. 議 事

1) 平成25年度（2013年度）収支決算承認の件

後藤由季子会計幹事より総会資料（2～10頁）に基づき、平成25年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算の監査については、以下のように報告された。

2013年10月28日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、同年11月8日に、郷通子監事、永田恭介監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成26年度（2014年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

後藤会計幹事より総会資料（11～12頁）に基づき、26年度の収支予算案、事業計画につき説明が行わ

れた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

5. 近藤滋第36回年会長より、年会開催状況につき報告と挨拶がなされた。

ここ3年、年会参加者数が減少傾向にある。会員の年齢構成は20代・30代が減っており、このままでは20代と50代の数が逆転するのは2020年頃ではないかと思われる。そこで若い世代を取り込みたいと考え、今回の年会では様々な新しい試みを行っている。以下はその一部である。

- ・サイエンスとアートの融合
- ・海外ポスドクの呼び寄せ（在外の日本人ポスドクに旅費を補助し、特別セッションに参加してもらう）
- ・ガチ議論（研究者を取り巻く問題を、政策決定できる人を前にして議論する）
- ・本日、開催された製薬会社・薬品ベンチャーによる特別シンポジウム「薬を創るということ」は約800名の参加者があり、好評をいただいたようである。会員諸氏のご協力に感謝したい。

6. 小安重夫第37回年会長より、2014年の年会開催企画案につき報告がなされた。

○会 期：2014年11月25日(火)～27日(木)

○会 場：パシフィコ横浜

《年会開催コンセプト》

「サイエンスに没頭できる年会」を目指して、学術プログラムを最重要視し、ライフサイエンスのすべてをカバーし全体を俯瞰できるような、分子生物学会の原点に立ち返るような年会としたい。学会員が持ち寄った宝である実験データを元に皆で議論ができる年会を目指したいとの説明がなされた。

- ・ポスター討論を最重視する。第32回年会の際のディスプレイ制を取り入れたい。
- ・各日とも午前中はシンポジウム、午後は一般口演をメインとした公募のワークショップを開催し、夕方には午後の一般口演発表を受けるかたちでポスター討論を行う予定である。

7. 塩見議長より閉会の挨拶があり、第36回総会が終了した。

上記、平成26年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成25年12月4日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

平成26年度通常総会

議 長 塩 見 春 彦 ㊟

議事録署名人 大 隅 典 子 ㊟

議事録署名人 小 安 重 夫 ㊟

平成 25 年度 (2013 年度) 収支決算報告

平成 25 年度 (2013 年度) 収支決算報告書

平成 24 年 10 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	1,300,000	1,784,000	
正 会 員	400,000	572,000	
学生会員	900,000	1,212,000	
2 会費収入	70,360,000	67,699,000	
正 会 員 (海外在住含む)	58,500,000	56,709,000	
学生会員 (海外在住含む)	10,500,000	9,710,000	
賛助会員	1,360,000	1,280,000	
3 事業収入	224,300,000	230,060,133	
①分子生物学・学術研究事業	212,750,000	212,614,724	
年会	212,750,000	212,614,724	第 35 回年会 (年会収入合計額 - 本部補助金定額 500 万円)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	11,550,000	17,445,409	
Genes to Cells 出版収入	11,500,000	17,428,189	Profit Share 16,428,189 円 2012 年分編集補助金 100 万円
その他の出版収入	50,000	17,220	「なぜなぜ生物学」印税
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より (奨励賞副賞、選考経費)
5 雑収入・預金利息	250,000	168,813	利息収入、ファーマバイオ (Bioedit 英文校正) 等
6 収入その他	0	1,000,000	第 1 回国際会議支援、1 会議が開催中止となったため補助金返金
当期収入合計 (A)	297,510,000	302,011,946	
前期繰越収支差額	185,501,968	185,501,968	
収入合計 (B)	483,011,968	487,513,914	
II 支出の部			
1 事業費	245,700,000	235,116,023	
①分子生物学・学術研究事業	225,050,000	218,086,931	(学術集会の開催等)
年会	217,750,000	211,770,881	第 35 回年会 (年会支出小計)
年会その他	300,000	316,050	第 35 回年会終了後の Web アンケート 設定と集計
国際会議支援 (補助金)	7,000,000	6,000,000	第 2 回 (2014 年) 国際会議支援、会議 2 件へ計 600 万円を助成
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	15,050,000	12,673,942	
会報刊行費	3,500,000	3,231,375	会報 103、104、105 号
Genes to Cells 編集費	5,200,000	2,864,467	編集経費については年 800 万円まで出版社負担
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	4,350,000	
ホームページ関係費	2,000,000	2,228,100	ホームページ 10 万円×12 カ月+メール配信+
③その他の事業	5,600,000	4,355,150	HP リニューアル費用 (2013.8) 184,800 円
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,016,485	副賞 2 名分 100 万円、賞状代
各種委員会	2,700,000	2,276,797	キャリアパス委員会、旧若手教育シンポ関係費、男女共同参画等
社会貢献・教育活動事業	800,000	107,258	平成 25 年度 SSH・学会ブース出展 (2013.8 パシフィコ横浜)、他
事業費その他	800,000	954,610	論文問題 Web アンケート、弁護士費用、生科連会費、その他
2 管理費	56,760,000	55,777,838	
事務所賃料	3,800,000	3,989,688	賃料・共益費、更新料、光熱費
給与手当	27,500,000	26,230,568	事務局スタッフ 4 名
法定福利費	3,700,000	3,898,797	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	60,000	51,962	職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	1,388,100	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	2,515,044	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,700,000	1,652,506	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	10,500,000	9,728,412	年会プログラム集、会報、会費請求書、送料等
旅費交通費	2,500,000	3,438,265	新理事会準備会議、臨時理事会、研究倫理委員会、他
会議費	500,000	535,850	新理事会準備会議、定例理事会、臨時理事会、他
支払手数料	250,000	176,228	
消耗品費	850,000	769,063	封筒印刷代含む
雑費	1,500,000	1,403,355	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	0	0	
3 租税公課	2,000,000	956,200	納税済 514,800 円 未払消費税 371,400 円 地方税 70,000 円
4 特定預金支出	1,250,000	1,251,000	退職給付引当金繰入 (規程に準拠)
5 予備費	500,000	0	
当期支出合計 (C)	306,210,000	293,101,061	
当期収支差額 (A) - (C)	-8,700,000	8,910,885	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	176,801,968	194,412,853	

(単位：円)

平成 25 年度（2013 年度）貸借対照表

平成 25 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目			
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	296,842,423		
前払費用	5,174,458		
立替金	8,765,831		
流動資産合計		310,782,712	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			312,584,713
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	101,367		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	371,400		
前受会費	426,500		
前受金	1,000,000		
預り金 1 (富澤基金)	107,717,368		
預り金 2	1,153,725		
仮受金	16,500		
流動負債合計		110,856,860	
2 固定負債			
退職給付引当金	7,315,000		
固定負債合計		7,315,000	
負債合計			118,171,860
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		185,501,968	
当期正味財産増加額		8,910,885	
正味財産合計			194,412,853
負債及び正味財産合計			312,584,713

(単位：円)

平成 25 年度 (2013 年度) 財産目録

平成 25 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	317,547	
郵便振替 00100-2-465016	640	
郵便振替 00110-1-901302	23,848,290	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	1,356,634	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 所沢支店	3,464,305	
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	217,036	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	73,400,601	
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	7,224,975	
普通預金 静岡銀行 東京支店	7,717,368	
定期預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	10,108,580	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,091,773	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	20,000,000	
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 本店営業部	19,094,674	
定期預金 静岡銀行 東京支店	100,000,000	
前払費用 事務所家賃 10 月分	308,849	
前払費用 事務所火災保険 H25.10 - H26.8 月分	11,459	
前払費用 2013 年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
前払費用 第 36 回 (2013) 年会企画会議等費用	504,150	
立替金 編集経費 (2013 年 1 月分以降)	8,765,831	
流動資産合計		310,782,712
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,001
資産合計		312,584,713
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費 (外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ)	43,063	
未払金 印刷費 (コピー・FAX 代)	24,662	
未払金 クレジットカード決済処理手数料(GMO)	33,642	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	371,400	
前受会費 平成 26 年度以降会費	426,500	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金 1 富澤基金	107,717,368	
預り金 2 源泉所得税	1,153,725	
仮受金 2014 年分 GTC (印刷版) 購読料	16,500	
流動負債合計		110,856,860
2 固定負債		
退職給付引当金	7,315,000	
固定負債合計		7,315,000
負債合計		118,171,860
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	185,501,968	
当期正味財産増加額	8,910,885	
正味財産合計		194,412,853
負債及び正味財産合計		312,584,713

(単位：円)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 25 年（2013 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 25 年度（2013 年度）富澤基金 決算報告書

平成 24 年 10 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	27,125	
当期収入合計	27,125	
前期繰越金	120,160,165	
合 計	120,187,290	
支出の部		
研究助成金	12,000,000	第 3 回研究助成者は 4 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	208,267	ヒアリング（2013.5.11）
選考経費 / 旅費	106,600	〃
事務・雑費	155,055	貸金庫使用料（静岡銀行）25,200 円、 送金手数料等 19,855 円、遠方からのヒアリング 出席者（*不採択）旅費支払 110,000 円
当期支出合計	12,469,922	
次期繰越金	107,717,368	
合 計	120,187,290	

●平成 25 年度（2013 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 25 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	7,717,368	流動負債	0
定期預金	100,000,000	基金会計（期首）	120,160,165
		今年度収支差額	-12,442,797
		基金正味財産	107,717,368
合 計	107,717,368	合 計	107,717,368

●平成 25 年度（2013 年度）富澤基金 財産目録

平成 25 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京支店	7,717,368
定期預金	静岡銀行 東京支店	100,000,000
合 計		107,717,368

平成 25 年度（2013 年度）個別注記表

平成 24 年 10 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
955,846 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に供している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 25 年度（2013 年度）決算に関して、平成 25 年 10 月 28 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 25 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 8 日に、学会事務所において、郷通子監事、永田恭介監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 18 期理事長 大 隅 典 子
理事（会計幹事）後 藤 由 季 子

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 大隅 典子 殿

平成25年11月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 郷 通子

平成25年11月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 水田 泰信

私たちは、日本分子生物学会の平成25年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成25年10月28日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 大隅 典子 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城 寛成

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成24年10月1日から平成25年9月30日までの平成25年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録並びに平成24年10月1日から平成25年9月30日までの平成25年度の善隣基金 会計報告、すなわち、善隣基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成25年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 善隣基金 の平成25年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 26 年度 (2014 年度) 収支予算

平成 26 年度 (2014 年度) 収支予算

平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	25 年度予算	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	1,500,000	
正 会 員	500,000	1,000 円× 500 名
学生会員	1,000,000	1,000 円× 1,000 名
2 会費収入	69,370,000	
正 会 員 (海外在住含む)	58,010,000	6,500 円× 9,700 名×約 92%
学生会員 (海外在住含む)	10,080,000	3,000 円× 4,800 名×約 70%
賛助会員	1,280,000	40,000 円× 32 口 (29 社)
3 事業収入	242,110,000	
①分子生物学・学術研究事業	228,100,000	〈学術集会の開催等〉
年会	228,100,000	第 36 回年会 (支出予算額 - 学会補助金定額分 500 万円)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	14,010,000	
Genes to Cells 出版収入	14,000,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 1300 万円、編集定額補助金 100 万円
その他の出版収入	10,000	創立 30 周年企画 3 部作・著作権使用料 (東京化学同人)
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4 雑収入	200,000	利息収入、出版社著作権管理機構分配金、ファーマバイオ (Bioedit 英文校正) 等
当期収入合計 (A)	313,180,000	
前期繰越収支差額	194,410,000	※ 25 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計 (B)	507,590,000	
II 支出の部		
1 事業費	270,500,000	
①分子生物学・学術研究事業	245,500,000	〈学術集会の開催等〉
年会	233,100,000	第 36 回年会 (定額補助金 500 万円は収入科目の中で精算) *実質 500 万円を補助
第 36 回年会・特別支援支出	5,100,000	海外ポストドク招聘企画・旅費補助 (学会本部負担 10 万円× 51 名分)
年会その他	300,000	年会終了後、年会運営に関する定型 Web アンケートの設定、集計作業
国際会議支援 (補助金)	7,000,000	2015 年開催の国際会議への支援 (補助金)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	15,050,000	
会報刊行費	3,500,000	
Genes to Cells 編集費	5,000,000	学会負担分 (編集費用 1300 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ)
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い (フリーアクセス料 100 万円を含む)
ホームページ関係費	2,200,000	10 万円× 12 カ月、メール配信 60 万円、その他 (理事長メッセージ英訳費等) 40 万円
③その他の事業	9,950,000	
理事会企画フォーラム関係費 (第 36 回年会)	5,000,000	研究不正問題対応 /6 セッションの会場費、機材費、その他
各種委員会	3,800,000	キャリアパス委員会 125 万円、同委員会企画ランチョンセミナー (2 セッション) 弁当代 75 万円、
社会貢献・教育活動事業	400,000	学協会連絡会大規模アンケート解析 150 万円、その他 30 万円
理事選挙	250,000	Web 選挙システムブラウザ調整等
事業費その他	500,000	
2 管理費	56,910,000	
事務所賃料	3,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	28,000,000	事務局 4 名
法定福利費	4,000,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	60,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,500,000	サーバー運用保守、UFJ 社決済基盤使用料含む
印刷費	1,750,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	9,200,000	会報、年会プログラム集、会費請求書の送料
旅費交通費	3,000,000	理事会、委員会、執行部会議、他
会議費	500,000	理事会、委員会、他
支払手数料	250,000	
消耗品費	850,000	封筒印刷代含む
雑費	1,500,000	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、他
3 租税公課	2,000,000	消費税、法人税等
4 特定預金支出	1,590,000	退職給付引当金
5 予備費	500,000	
当期支出合計 (C)	331,500,000	
当期収支差額 (A) - (C)	-18,320,000	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	176,090,000	

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 一條 秀憲
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階

日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 月田早智子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階

日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第45回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1	総額 2億5,000万円	2014年 2月4日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。
山田科学振興財団 2014年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1	15件程度 (本学会の 推薦枠は5件)	2014年 2月28日	1件当たり 100～500万円、 総額3,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 [推薦書は山田財団HPより ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/]
第30回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1722 〒102-8472 千代田区一番町8 日本学術振興会内	1件 (1件)	2014年* 5月16日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第29回の授賞分野は「進化生物学」。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第31回持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	2件以内 (1件)	2014年* 7月31日	1件1,000万円	学術賞は次の6項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 (2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能/病態解析に関する研究 (3)免疫/アレルギー/炎症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器/血液疾患の病態解析/治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
第32回研究助成		総額 2億4,000万円	2014年* 6月20日	1件 300万円	
第31回国内および海外留学補助金		総額 1,000万円	2014年* 6月20日	1件 50万円	
平成27年度笹川科学研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル	生物系で約90件 (25年度実績)	募集期間 2014年* 10月1日 ~ 10月15日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。
上原賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒171-0033 豊島区高田3-26-3	2件以内 (1件)	2014年* 9月5日	金牌、 2,000万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第31回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒150-0036 渋谷区南平台町15-15-601	5件以内 (2件)	2014年* 9月19日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者(ただし締切日現在満50歳未満)。
第7回井上リサーチアワード		4名以内 (うち1名以上 女性研究者)	2014年* 7月31日	1人当たり 500万円 (研究期間は2年)	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。期間は2年。
第23回木原記念財団学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 502-4810 〒230-0045 横浜市鶴見区末広町1-6	1件 (1件)	2014年* 9月30日	賞状、 200万円	最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として締切日現在50歳以下の者。
住友財団2014年度基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒105-0012 港区芝大門1-12-6 住友芝大門ビル2号館	総額 1億7,000万円 100件程度	2014年* 6月27日	1件当たり500万円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。若手研究者(個人またはグループ)を対象とする。
第55回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒104-0061 中央区銀座3-7-12	2件 (1件)	2014年 1月31日	副賞1,000万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成27年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒100-8959 千代田区霞が関3-2-2	科学技術賞140件(年)のうち、研究部門は40件程度 若手科学者賞は100名程度(学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2014年* 7月16日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた40歳未満の若手研究個人。
平成26年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1	1件 (推薦枠は若干件)	2014年* 9月30日	賞状、賞牌、 副賞300万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興財団研究開発助成		総額 1,200万円	2014年* 9月30日	1件当たり 100万円以下	上記同様に研究対象とする、国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の日本人研究者。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2件前後 (2件)	2014年* 10月10日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大きい者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	2014年* 10月10日	特に定めず最大 3,000万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者(原則として45歳以下)。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 35 件 指定機関からの 推薦必要	2014年* 9月16日	1件 100万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第46回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKDビル 8階	1件 (1件)	2014年* 10月1日	金メダル、 1000万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第46回海外学者招へい助成金		前期・後期各 10件	2014年* 6月2日・ 10月1日	1件 20～80万円 まで(エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成		15件以内	2014年* 10月10日	1件 120万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	1件		賞牌ならびに 副賞 150万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている50歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2015年* 1月9日	1件 30万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1件 30万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成27年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10数件	2014年* 11月28日	1件 250万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
第11回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-8472 千代田区一番町 8 番地	25件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あり)	2014年* 4月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者(45歳未満)。
第5回日本学術振興会育志賞		16件程度 (1件)	2014年* 6月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰(34歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1件	2014年 4月30日	賞状、金メダル、 300万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の4分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成26年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 5,000万円	2014年* 7月31日	助成金総額 約 5,000万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
2014 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近は 4~5 件 (1 件)	2014 年* 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 26 回加藤記念 研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス 研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2014 年* 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。
平成 26 年度(第 3 回) 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 3780-2317 〒 150-0021 渋谷区恵比寿西 2-20-3 代官山 CA ビル	自然科学部門 で 2 件以内 (1 件)	2014 年* 9 月 30 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
平成 26 年度(第 52 回) 三島海雲学術研究 奨励金		全部門計 45 件程度	2014 年 1 月 10 日 ~ 2 月 28 日	自然科学部門は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
一般研究助成		研究課題ごと に 10 件	2014 年* 8 月 20 日	1 件 300 万円	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行っている研究者。
大型研究助成	(公財)発酵研究所 ☎ (06) 6300-6555 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85	合計 4 件	2014 年* 8 月 20 日	1 件 1,000 万円	研究課題 (1)微生物の分類、生態、進化に関する研究 (2)発酵、応用微生物に関する研究 (3)健康、環境に関与する微生物の研究
若手研究者助成		1 件	2014 年* 8 月 20 日	年間 500 万円 助成期間 3 年間	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行う 40 歳以下のポスドク。
寄付講座助成		1 件	2014 年* 9 月 19 日	2 億 5 千万円 設置期間 5 年間	微生物の研究を行う寄付講座の設置を希望する日本の国立大学、公立大学および私立大学のいずれかに属する部局(研究科、学部または研究所)を対象に、独創性があり、新しい発見を目指した研究に助成。

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第16回マリンバイオテクノロジー学会大会

第16回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催します。

会 期：平成26年5月31日(土)～6月1日(日)

会 場：三重大学生物資源学部校舎

大会役員：大会会長 幹 渉
三重大学大学院生物資源学研究所 教授
実行委員長 田丸 浩
三重大学大学院生物資源学研究所 教授
委 員 柴田敏行
三重大学大学院生物資源学研究所 講師
〃 柿沼 誠
三重大学大学院生物資源学研究所 准教授
〃 船原大輔
三重大学大学院生物資源学研究所 准教授

大会事務局：〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577
三重大学大学院生物資源学研究所内
マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
E-mail：mbio2014.mie@gmail.com
(お問い合わせ等はメールでお願いします。)

大会の内容：

1. 一般講演 (口頭発表、ポスター発表)
2. シンポジウム (一般、ミニ)

発表形式：

1. 口 頭 発 表：一般講演は質疑応答を含め15分
液晶プロジェクターを使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの
表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物 2. 微細藻類 3. 大型藻類・付着生物
4. 魚介類 5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラルイゼーション 7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応 9. その他

発表申込みの締切：平成26年4月18日(金)必着

講演要旨の締切：平成26年4月18日(金)必着

事前参加登録の締切：平成26年5月9日(金)必着

事前参加登録費：

会員 5,000円 学生 2,000円

非会員 9,000円 非学生会員 4,000円

当日参加費：

会員 7,000円 学生 3,000円

非会員 10,000円 非学生会員 5,000円

※協賛頂きました団体(分子生物学会)の会員の方は、当学会会員と同等の参加費で参加頂けます。なお、発表は学会会員に限ります。

講演申込み方法および参加登録方法の詳細は、大会ホームページでご確認ください。

第16回大会ホームページアドレス：

<http://www.sansui.bio.mie-u.ac.jp/mbio2014.html>

学会ホームページ：<http://marinebiotechnology.jp/>

○第27回国際ポリフェノール会議2014名古屋 合同開催 第8回タンニン会議2014名古屋

主 催：第27回国際ポリフェノール会議組織委員会
会 期：2014年9月2日(火)～9月6日(土)
会 場：名古屋大学豊田講堂・シンポジオン・野依記念
学術交流館

(〒464-8601 名古屋市千種区不老町)

[交通] 地下鉄名城線 名古屋大学駅下車

費 用：事前参加登録：2014年5月31日まで

GP会員：50,000円、非会員：65,000円、

学生：25,000円、懇親会：10,000円

当日参加：2014年6月1日以降

GP会員：60,000円、非会員：75,000円、

学生：30,000円、懇親会：15,000円

討議項目：ポリフェノールおよび関連化合物に関するすべての研究(化学、生物学、農学、園芸学、薬学(漢方)、医学、食品科学(生産・加工、利用、機能性)、工学、情報科学)を対象とする。

トピック1：化学(物理化学、材料科学等を含む)

トピック2：生物学(生合成、遺伝学、代謝工学等)

トピック3：植物と環境、バイオマス

トピック4：食品学、栄養学(健康科学、機能性、加工を含む)

トピック5：薬学(生薬、伝承薬、漢方等)

トピック6：タンニンとその機能

プログラム：招待講演(14題程度)、口頭発表(25題程度)、およびポスター発表

発表申込：要旨締切日：2014年2月28日、プロシーディング締切日：2014年5月31日

申込方法：大会HPよりオンライン申込にて受け付けます。詳しくは、本会議HP(<http://www.is.nagoya-u.ac.jp/icp2014/>)をご覧ください。

申込先および問合せ先：

第27回国際ポリフェノール会議組織委員会

事務局長：福島和彦

(名古屋大学大学院生命農学研究所 森林化学研究室内)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL：052-789-4159 FAX：052-789-4163

E-mail：kazu@agr.nagoya-u.ac.jp

第18期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2013年1月1日～2014年12月31日)

大隅 典子 (東北大・医)

副理事長

小原 雄治 (遺伝研)

中山 敬一 (九大・生医研)

理事

阿形 清和 (京大・理)

五十嵐和彦 (東北大・医)

一條 秀憲 (東大・薬)

上村 匡 (京大・生命)

岡田 清孝 (自然科学研究機構)

近藤 滋 (阪大・生命機能)

佐々木裕之 (九大・生医研)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

田中 啓二 (都医学研)

長田 重一 (京大・医)

花岡 文雄 (学習院大・理)

三浦 正幸 (東大・薬)

山本 雅之 (東北大・医)

荒木 弘之 (遺伝研)

石川 冬木 (京大・生命)

上田 泰己 (東大・医)

大隅 良典 (東工大・フロンティア研究機構)

後藤由季子 (東大・薬)

相賀裕美子 (遺伝研)

塩見美喜子 (東大・理)

高橋 淑子 (京大・理)

月田早智子 (阪大・生命機能)

西田 栄介 (京大・生命)

町田 泰則 (名大・理)

山本 正幸 (基生研)

渡邊 嘉典 (東大・分生研)

監事 郷 通子 (情報・システム研究機構)、永田 恭介 (筑波大)

幹事

庶務幹事 石野 史敏 (医科歯科大・難治研)、本間美和子 (福島県立医大・医)

会計幹事 後藤由季子 (東大・薬)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 荒木 弘之 (遺伝研)、金井 正美 (医科歯科大・実験動物センター)

集会幹事 武田 洋幸 (東大・理 / 第36回年会)、塩見美喜子 (東大・理 / 第37回年会)

第18期執行部

大隅理事長、石野庶務幹事、本間庶務幹事、
荒木広報幹事、金井広報幹事、小原副理事長 (オブザーバ)

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

賞推薦委員会

一條秀憲 (委員長)、五十嵐和彦、相賀裕美子、長田重一、花岡文雄

研究助成選考委員会

月田早智子 (委員長)、大隅良典、佐々木裕之、高橋淑子、町田泰則

国際会議支援・選考委員会

西田栄介 (委員長)、上田泰己、岡田清孝、田中啓二、三浦正幸

キャリアパス委員会

塩見美喜子 (委員長)、石井 優、井関祥子、岩崎 渉、小野弥子、五島剛太

小林武彦、斎藤通紀、佐藤 健、白髭克彦、東山哲也、柳田素子

研究倫理委員会

小原雄治 (委員長)、岡田清孝、塩見美喜子、篠原 彰、町田泰則

生命科学教育

篠原 彰 (担当理事)

生命倫理懇談会

〈検討中〉

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」基金運営委員会 (任期：2010年10月1日～2014年12月31日)

山本正幸 (委員長)、阿形清和、岡田清孝、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄

谷口維紹、大隅典子 (職指定委員)

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2014年2月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社 イノベーション研究所
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
コスモ・バイオ株式会社 開発部
株式会社サン・フレア
第一三共株式会社 バイオ創薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 マーケティング部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究開発管理グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(28社、50音順)

■第 37 回（2014年）日本分子生物学会年会 公式サイト

URL: <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <http://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

第37回 日本分子生物学会年会

The 37th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan



会期 **2014年11月25日(火) ~ 27日(木)**

年会長 **小安 重夫** (理化学研究所統合生命医科学研究センター)

会場 **パシフィコ横浜**

演題投稿受付期間 **2014年7月1日(火) - 7月31日(木)**

事前参加登録期間 **2014年7月1日(火) - 9月30日(火)**

連絡先 第37回日本分子生物学会年会事務局 (株式会社エー・イー企画 内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4F
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2014@aeplan.co.jp

大会HP <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014>



The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第 107 号 (2014年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——大隅 典子